

話題はデイヴィッド・ヒューム氏の文體のことに轉じた。ジョンソン、「彼の文體は英國式ぢやない。彼の文章の構成はフランス式だ。ところで、フランス式構文と英國式構文は、本質的に云へば、同等に善いものかも知れない。しかし、英語を確立されたものと認めるからには、彼の態度は間違つてゐると云はねばならん。わしの名前は元來は何もジョンソンでなくてはならぬわけではなく、例へばニコルソンであつても差支へないわけだ。しかし今、君がわしのことをニコルソンと呼べば變な話だ。」

この頃、ルッソーの人類の不平等についての論文が盛んに話題に上つた。それに關聯してデムブスター氏は、財産や地位などの利益は、賢い人間にとつては取るに足らぬもので、賢い人は眞價のみを尊重すべきである、といふ意見を吐いた。ジョンソン、「もし人間が獨りぼつちで森の中で暮してゐる野蠻人だつたら、この説は正しいかも知れない。しかし文明の社會ではわれ／＼はみんなお互に依存してゐて、われ／＼の幸福は他人の評價の善し惡しに大いに左右される。ところで文明の社會では、外部的の優越がわれ／＼を一層尊敬されしめる。良い上衣を身にまこつた者は、粗末なものを引つかけた者より一層好い待遇を受ける。君はそれを分析して見て、そんなことは結局大したことではない、と云ふかも知れない。しかしそんなことを云つたつて始まらない。それは總體の組織の一部になつてゐるのだから。聖ポール寺院を粉々にくだいてアトムにしてしまひ、一つのアトムをとつて考へて見たまへ。成程、何にもならないものだ。が、それ等のアトムをすつかりつなぎ合せて見れば、そこに聖ポールが出来る。人間の幸福も同じ理窟で、

一つ一つとれば極めて些細だとも云へるところの多くの要素から出来上つてゐるのだ。文明の社會では、個人の眞價は金銭ほど役に立たないやうだ。一つ實驗して見ればよい。街へ出て、一人の男をつかまへて道徳上のお説教を與へ、別の男に一シルリングを與へて、どつちが一層君を尊敬するか、ためして見たまへ。人が生身を支へることだけを欲するなら、サー・ウィリアム・ベティは一年に三磅で足りると、割り宛ててゐる。しかし時世も大分違つてゐるから六磅といふことにしよう。それだけ有れば、腹もくちくなるし、雨露を凌げるし、丈夫な、長もちのする上衣——牡牛の良い皮からでも作るとして——まで手に這入るわけだ。さて、これ以上は人工的なもので、仲間の人間から一層大なる尊敬を得んがために欲望されるのだ。所で、年百磅が年六磅より、人をして一層重きをなさしめ、又勿論、一層多くの幸福を得しむるならば、同じ割合が年六千磅についてもあてはまり、それから上幾らでも、富が積めるかぎりにはあてはまるであらう。時には、大財産を擁してゐる者が小財産の者ほど幸福でないといふこともあるであらう。しかしそれは、彼が大なる財産を持つてゐるからではなく、別の原因によるのに違ひない。何となれば、他の條件が同じならば、文明の社會に於いて、富める者は貧しい者より幸福であるに違ひないからである。富は、適當に使用されたら（さうされないとするれば咎は常人にある）、最大の利益を生ずるものであるから。金銭は實際、それだけでは何の役にもたゝない。それは手離すときのみ役にたつのだ。ルッソーのみに限らず、すべて逆説をこねる人間は、新しがらうといふ子供っぽい欲望に驅られてゐるのだ。わしは子供の時分、議論する時にはいつも間違つた方の立場を選んだ。

その方が一ばん巧者のこと、即ち一ばん新しいことが云へるからである。富や、その他の外部的な有利さを賤すために持ち出される議論より一層尤もらしい議論が、どんな問題を主張するためにも動員され得るのだぜ。例へば盗みの問題だ。何故盗みは罪とされなければならぬのか？　いかに不正な方法によつて屢々富が作られるかを考へ、不正によつて得られたものを所有するのは不正にちがひないと考へて見れば、或る人間が他の人間の財産をとつたつて何處に害があるのか？　更に、多くの人間がその財産を悪用することを考へ、盗んだ人間の方が遙かに善くそれを使用するかも知れぬと考へて見れば、盗みは随分許さるべき行爲だと辯護できよう。然しながら人類の経験は盗みが非常に悪いことだといふことを發見し、その廉で人を絞罪に處することさへ憚らない。わしは、このロンドンで、おそろしく貧乏な男としてうろついてゐた頃には、貧乏の利益の大的辯護者であつた。しかし同時にわしは、貧乏を沁み／＼遺憾に思つた。貧乏は不幸に非ず、と表明せんために立てられた議論がかくも多きことは、たま／＼以てそれが明らかに大なる不幸であることを示すものだ。澤山財産があると大へん幸福にくらせるると説得するために人が骨を折つてゐるのを君は見かけないだらう。——さういふ譯で、よく世人は、王様はどんなにみじめだらうなど云ふものの、内心みんなさうなつて見たいと思つてゐるのだ。」

私は、地位の區別は文明社會では非常に重要だと思ふから、もし同じ日に英國の第一の公爵と英國の第一の天才とのそれ／＼から正餐に招かれたら、どつちを選んだものか迷つてしまふであ

らう、と云つた。ジョンソン、「一遍だけのことなら、そして何處で正餐があつたのか人に知られないのなら、第一等の天才との正餐を選ぶことにならう。しかし人の尊敬を博するためには、英國第一の公爵と正餐を共にすべきだ。何故なら君が會ふ人のうち十人中九人までが、公爵と正餐を共にしたといふわけで君を一層尊敬するだらうし、そのえらい天才その人でさへ、君がえらい公爵に招かれたといふ點で君を一層よく待遇するだらうから。」

彼は彼の、地位を尙び富を重んずる主義が、假りにも卑しい、利己的な動機に發するものではないか、といふやうな一切の疑念から十分自らを守るやうに心がけた。彼は文人としての自分の獨立を主張したのである。彼は云つた、「文學で飯を食つた者のうちわしほど獨立的に生きたものは無い。」彼はそのため、『辭典』を編纂するのに必要以上の時間を費したと云つた。彼はこの偉大な事業についてわれ／＼の讚辭を満足げに受け、『クルスカ學士院』(譯者註、フロ)はそれが唯一人の手で成されたといふことを殆んど信じ得なかつたといふ話をした。

次の朝、私は彼が獨りで居るのを見出した。その折の、次のやうな彼の話の斷片が保存してある。話題に上つたある紳士について彼はかう評した、「あの男のやうに何から何まで不愉快な感じを興へる男には久しく會つたことが無い。あの男はまるで主義節操がさだまらず、且つ他人を迷はせようと欲してゐる。」私は、その人の主義が或る有名な異端の作家によつて毒されたものであるが、それにも拘らず、本人は慈悲心ある善人であるといふことを述べた。ジョンソン、「われわれは、主義信念に基づかざる、例の本能的な、體質的の善良さには信用が置けない。わしは

あゝいふ人間が、大へんあたりさばりの良い社會の一員であることは認めよう。わしは彼が正しい道を踏み外す誘惑はあまり受けないやうな境遇に置かれてゐると考へることが出来る。そして、誰だつて、善徳の教ふる所に背かしめるやうな何か強い動因がない限りは善徳を好むものであるから、あの人間が何にも悪いことをしてゐないとわしは考へることが出来る。しかし、もしあゝいふ人間が金に困つたとしたら、わしは彼を信用する氣にならん。それから、彼が若い婦人のそばにゐるとなつたらわしは斷然信用しない。何故なら此の道に限つては誘惑が常に存在するからだ。ヒュームやその他の新しがり屋は虚榮的な連中で、どんな犠牲を拂つても自分自身を満足させようと欲するのだ。眞理は彼等の虚榮心に十分な糧を與へない。だから、彼等は誤謬に趨せ赴いたのだ。あゝいふ連中にとつては、眞理はもう乳を出さない牝牛なのだ。だから彼等は今度は牡牛を搾りにかゝつたのだ。もしわしが眞理を犠牲にして自己の虚榮心を満足させようといふ氣になつたなら、随分と持てはやされたらうよ。ヒュームがキリスト教に反對して唱へたあらゆる説は、彼が書いたずつと以前にわしの頭に浮んだことなのだ。かういふことを忘れてはいけない、——一つの體系が確實な證據の上に確立した上は、少數の、部分的な異論で、それが動搖するべきではないのだ。人間の心は局限されてゐるから、一つの問題のすべての部分を包攝することができない。従つて如何なることに對しても異論を擧げれば擧げ得る。充實空間に對しても異論があるし眞空に對しても異論がある。しかしどつちか一つは確かに眞實であるに違ひない。」

その夜、ジョンソン氏と私はストランドにある「タークス・ヘッド」珈琲店の別室で夜食を認めた。彼は云つた。「こゝのお主婦さんは人の善い丁寧な婦人だのにあまりはやらないから、わしは此の家を最良にしてやつてゐるのだ。」

「君、わしは若い者と知り合ひになるのが好きだ。何故なら、第一、わしは自分が老人になりつゝあると考へるのが嫌だ。第二に、續くとすれば若い知り合ひが一ばん長續きするわけだから。その次には君、若い者の方が老人より一層多くの美德を有してゐるからだよ。彼等はあらゆる點で一層高潔な心情を具へてゐる。わしは現代の若い奴等が好きだ。彼等は昔のわれ／＼より機智とユーモアと人生に關する知識に富んでゐる。しかし彼奴等は昔のわれ／＼ほどの學問は無いね。ねえ君、わしは若い時分には一所懸命に讀書したものだ。わしが十八歳の時には現在知つてゐるだけのことを殆んど知つてゐたといふことは、悲しむべきことだが、どうも事實らしく思はれる。成程批判力はあまりできてゐなかつた。けれども事實はすべて知つてゐた。わしがオックスフォードにゐた頃、ある老紳士から、かう云はれたことを良く覚えてゐる、『お若い、今のうちに精々書物に没頭し知識を蓄へなさい。段々年をとると書物に目を曝らすことが億劫な仕事になるから。』」

この時はじめて彼は自分が憂鬱症になやまされてゐること、そのために勉強と思索をはなれて、さまざまの人生の憂さばらしに趨せざるを得なかつたことを洩らした。彼は、憂鬱症を退治する

ためには、二六時中、心を遊ばせて置かないこと、運動を十分にすること、飲食を節し殊に夜飲酒せぬこと、を推奨した。憂鬱症の人々は苦痛を忘れんがために兎角不節制に赴き勝ちであるが、それは却つて彼等を不幸に陥れるものだと言つた。激しい労働をし、つましい生活をしてゐる労働者は、精神の沈衰に悩むことは全然無いと云へないまでも稀である、と云つた。

彼は又、階級に服従する義務を力説した。「わしは貴族から金を奪はないと同様に、それに屬する尊敬を奪はうとは思はない。わしは自分が社會といふ大きな組織の一つの役割りを受持つてゐるものと考へる。そして己れのされんと欲する如く人にもする主義だ。わしは貴族に對し、假りに、わしが貴族であり彼がサム・ヂョンスンであつた場合に彼に振舞つて貰ひたい通りに、振舞ふつもりだ。君、このロンドンに大の共和主義者のマコーレイ夫人といふ人がゐる。ある日わしはその家を訪れたとき、わしは非常に生真面目な顔をして彼女に云つた、*「奥さん、わしは今度あなたの考へに改宗しましたよ。全人類は同等の足場に立つものだと思ふので、信ずるやうになりました。そこで奥さん、わしが眞剣であるといふ、疑ふべからざる證據をお目にかけて欲しいと思ふのだが、こゝに非常に物の解つた、慇懃で行儀正しい同胞が居られる——それはあなたの従僕です。あの人の一つ、この席に列なつてわれ／＼と食事を共にさせて戴きたいのです。」* わしはかう云つて平等主義の馬鹿らしさを彼女に示さうとした。以來彼女はわしを嫌つてゐるよ。君、かの平等主義の連中は、上の者を自分等の所まで引き下げようと思つてゐるので、下の者を彼等の所まで引上げるのは御免なのだ。彼等はみんな自分の下に多少の人を置きたいのだ。そんなら自分の上に

も幾らか人がゐても良いではないか。」私はある著作家が出過ぎた振舞ひをし、又仲間入りを許された貴族等に對して何等の敬意を表せず、甚だ私に不快な感を抱かせたことを話した。ヂョンスン、「その男が貴族に對してしたと同様に、靴屋がその男と平等を主張したとして見たまへ。どんなに彼は眼をむくことだらう。すると靴屋は云ふだらう、*「お前さんは、何んだつてそんなに眼をむきなさるんだ？」* わしは大へん社會のためになることをして居るだ。成る程、その代りに代金は貰つてゐるが、お前さんだつて同じことだらう。おまけに、残念なことにお前さんの方が餘計貰つてゐる。すること云つたら大して必要の無いことだに。世の中はお前さんの書く本が無くなつたつて、わしがつ造る靴が無くなつたほどは困らないだらうに。」かういつた調子で、もし世の中に、授かりものとして嫉み心を起させない、階級の差別についての一定不變の規則が無かつたら、二六時中優越争ひの絶え間が無いだらう。」

私はサー・ヂェームス・マクドナルドの話をはじめ、彼が、非常に卓越したところの有る青年で、イートンでもオックスフォードでも大へん評判が好かつたが、又スコットランド山岳地方の大頭首のもつてゐる親分肌をも兼ね具へてゐると話した。そして彼が私に、ヂョンスン氏には未だお目にかゝつたことが無いが、かねて大なる尊敬を抱いてゐる。が、同時に多少の恐怖がそれに混じつてゐる、と云つた話をした。ヂョンスン、「その人がわしと付き合ふやうになつたらその両方とも薄らぐだらう。」

この青年紳士のことからスコットランドの西部諸島の話に移つたが、彼は其所へ往つてみたいといふ希望を洩らした。私はその時、それを大へんロマンティックな空想のやうに思ひ、後日それが實現されることにならうとは思ひがけなかつた。彼は、幼少の頃、父からこの群島についてのマーティンの著書を與へられて大きに喜んだといふこと、又、聖キルダ島の男がグラスゴーの高教會の建物を見て、これは岩をくり抜いて作つたのだ、と思つたといふ記事（老ジョンソン氏はそれに息子の注意を促したのである）に、ひどく感興を唆られたといふことを語つた。彼は、非常に良いつれが私の不在中に出来ないかぎりには——そんなことは多分有るまいと思ふが——私が旅行から歸つた後に一緒にヘブリディーズ諸島に行かうと云つた。そして「君ほど氣に入つた人間は滅多に無い」と附け加へた。私が英國を出立することについて話すと、彼は愛情をこめて云つた、「親愛なるボズウェル君、もしこれが二度と會へないのだつたら、別れるのが實に辛いことだらうよ。」度々念を押すやうであるが、彼の深切さを示す、かういふ例はたしかに私の手前味噌めくけれど、私がそれを記載するのは虚榮心からではなく、より善い動機からであることと、讀者に理解して戴けると私は信じてゐるのである。即ち之等の例は、一部の人々が彼の偉大な力量を止むを得ず認める一方に於いて、頑強に否定しつゞけた彼の心の優しさと篤實さを證據立ててゐるからである。

彼は、學校に通つてゐる少年が、人間のうちで一ばん幸福なものである、と主張した。私はそれとは違つて、成年の方が幸福である、といふ意見を主張し、——私は今でも相變らずさう信じ

てゐる——學校に於いて忍ばなければならぬ心配や悩みを縷々として述べた。ジョンソン、「いやいや。子供が鞭で打たれるのは、大人が世間の非難を蒙るほどには身に徹へはしない。大人は名譽を冀ふものだ、そしてそれを多く手に入れ、ば入れるほど、益々それを失ふのがこはくなる。」私は窃かに考へた、「偉大なるサミュエル・ジョンソンにして、尙且つさういふ恐れを眞に抱くといふことが有り得るのだらうか、我が高き名譽は揺がざる磐石の上に立つてゐる、といふ自信が無いのだらうか？」

この晩、彼はサー・デーヴィッド・ダリムブルのために、なみ／＼と乾杯した。「人物であり學者であり才人であるとして。」彼は云つた。「わしは此の人に關しては君の口から聞いただけだ。しかし、わしが敬服してゐることを彼につたへてくれたまへ。その人はあまり世の中に出ないから、せめて彼のことを聞き知つた少數の者の稱讚を受くべきだ。」

七月二十六日（火曜日）、私はジョンソン氏が獨りで見出した。……われ／＼は子供の教育について語つた。私は、何を最初に彼等に教へたら一ばん良いと思ふか、と訊いた。ジョンソン、「君、何を最初に彼等に教へるか？ そんなことは、どつちの足を最初にズボンに突つこむべきかといふのと同様、大した問題ではない。どつちを最初に突つこむべきかを論じてゐる間にお尻は丸出しになつてゐるのだ。君の目に二つの課目のどつちを先に教へたものかと思案してゐるうちに、他の兒は兩方とも學んで了ふ。」

七月二十八日（木曜日）、私たちは再び「タークス・ヘッド」珈琲店で二人だけの夜食をとつ

た。ジョンソン、「スウィフトは眞價以上の評判を得てゐる。彼の長所は強力な理性である。ユームアは相當に良いが、非常に良いとは云へない。わしは『桶物語り』が彼の作であるかどうか、疑つてゐる。彼はそれを自作であると認めたことが無いし、普段の彼よりずっと上出来だから。」

「トムソンは大抵の作家に劣らぬ詩人的素質を具へてゐたと思ふ。彼にはあらゆる物が我が好みの道を媒介として姿を現はした。その二本の蠟燭が燃えてゐるのでも、彼は詩人の眼を以てのみ眺め得たのだ。」

「***は大へん機智に富んでゐるやうですね。」ジョンソン、「わしはさうは思はん。なるほど彼はしよつちゆう機智を試みるが、失敗してすふ。わしは、人が機智を試みて失敗するのを見ると、丁度人が溝を跳び越えようとしてその中におつこちて了ふのを見るのと同様、興ざめがするのだ。」

フットが意地悪く吹聴して喜んだ、トマス・シェリダン氏についてジョンソンの云つた言葉を持ち出すと、彼は大笑ひした。彼は「實際シェリは鈍才だ、生來の鈍才だ。しかし現在われ／＼が見るやうな男になるには、随分と苦勞したに違ひない。あれほどの愚鈍は尋常の産物でない。」と云つたのである。彼は云つた。「あれで、彼の眞價は十分認めてやつたわけだ。」

彼は更に附け加へた、「シェリダンは、わしのことか我慢ならんのだ。わしは單刀直入にから質問する、一體君は何を教へようといふつもりなのか？」それに、シェリダン氏がその微力を揮つたつて、この偉大な國の國語にどれほどの影響を與へ得るか。君、それは一錢の蠟燭をドー

ヴァーにおつ立ててカレールを照らさうといふものだ。」

私は重ねて、ユトレヒトに往つてからの勉強法について彼の助言を乞ふた。彼は云つた、「左様、そのことについては一日ゆつくり談じよう。二人でグリニツヂに往つて飯を食べながら話すとしてしよう。」次の土曜日がこの遠足のためにあてられた。

この夜、われ／＼が腕を組んでストランドを歩いていくと、街の女が例の唆るやうな態度で呼びかけた。「不可ん、不可ん、」とジョンソンは云つた。「駄目だよ、君。」しかし彼は女をむごくはあしらはなかつた。われ／＼はかういふ女性の惨めな生活について語り、兩性間の非合法な取引によつて、一般に幸福よりは遙かに多くの不幸がかもされる、といふことに意見が一致した。

七月三十日（土曜日）、ジョンソン博士と私は、テムブル棧橋で舢舨舟に投じグリニツヂに向つて出發した。私は彼に、ギリシア語ラテン語の知識が良い教育に缺くべからざる必要物だと、ほんとに考へるかと言つた。ジョンソン、「正にその通りだ。その譯は、それを知つてゐる者は知らぬ者に較べて遙かに有利な條件を具へてゐるからだ。そればかりではない、學問といふものは、さういふこととあまり交渉が無さうな日常生活の取引に於いてさへ、人々に大きな相違をもたらし、世の中の仕事をうまくやつて行けますね。」ジョンソン、「なるほど。それは學問が、どう考へても何の役にも立たない場合には、ほんとかも知れない。現に、この少年は學問は無くして

も、世界最初の船乗りであつたアルゴ號の乗組員たちにオルフィウスが聞かせた歌が歌へでもするやうに、巧みに舟を漕いでくれるからね。」さう云つて彼は少年に呼びかけた。「おい君、君はアルゴ號乗組員の話の聞くために幾ら出す氣があるかね？」少年は云つた。「はい旦那、持つてみるだけ出しますよ。」彼は少年の答へを聞いて大へん喜んだ、そしてわれ／＼は彼に二倍の賃銀をやつた。デモンソン博士はそこで私の方を顧みて云つた。「君、知識を欲するのは人間自然の感情だよ。すべての人間は精神的に墮落してない限り、知識を得るためには、有りつたけのものを投げ出さうといふ氣があるものだ。」

われ／＼はオールド・スワンで一旦上陸し、ピリングスゲートまで歩き、そこで再びオールドを執つて銀のテムズ河を滑るやうに動いた。それは大へん好く晴れた日であつた。數多く、種類さまざまな碇泊中の船と、兩岸の美しい景色はわれ／＼をたのしませた。

私は説教の話もち出し、メソヂストと呼ばれる人々が、大いに成功してゐることを話した。デモンソン、「それは彼等が、飾らない、親しみ深い態度で話をするからだ。この方法でなければ大衆を益することはできない。天分あり學問ある牧師も、自分等の會衆にそれが適してゐると思へば、義務の觀念から、さうすべきである。物の解つた人々はさういふやり方を褒めるだらう。人間の最高の能力たる理性を害ふからと云つて、飲酒を罪惡として排斥するのでは、大衆には何の役にも立たぬだらう。しかし彼等に、泥酔の發作で死ぬかも知れぬと云つて、それがどんなに恐ろしいかを解らせてやれば、必ず深い感銘を與へるにちがひない。君の國のスコットランドの

牧師たちが、その質朴な流儀を棄てる時が來れば、その國の宗教は忽ち衰微してしまふだらう。」デモンソンの意味したこの言葉は、永久に忘れられないでほしいものだ。

私はデモンソンがその詩『ロンドン』に於て、好みの場所として歌ひたゞへたグリニツヂに彼と共に遊んだ、といふことを大いに喜んだ。私はポケットにこの詩を入れてみたので、その數行を感懐をこめて朗誦した。

「テムズの岸に立ち、言葉も無くわれ等想へり

グリニツヂ、銀のうしほにほゝゑむところ

エリザを生みし地を喜びて

われ等膝まづき、聖なる土に口づけす。」

やがて彼は、私の勲學の方針について助言するといふ、その日の仕事にとりかゝつた。ところで、甚だ残念ながら、彼が云つたことについての私の記録が甚だ貧弱であることを告白しなければならぬ。私は、躍々人を動かす雄辯の炎を感嘆を以つて思ひ出す。それは、私の内なるあらゆる知性を呼び醒まして最高の調べにまで達せしめた。しかしあまりに私を眩惑して、私の記憶は彼の談話の實質を保存し得なかつたにちがひない。即ち、それに對する覺書は僅かに次の通りであつた。「彼は廣大な人間の知識の全領域を提起した。そして余に、孰れか特殊な部門を選んで之に卓越すること、但し、あらゆる種類について少々つつ心得て置くことを忠告した。」

われ／＼は夕刻グリニツチ公園を歩いた。彼は私の性向を試みるつもりらしく、かう訊いた、「どうだね、好い景色だとは思はないかね？」私は、自然の美については別に微妙な感覚を持ち合さず、「人間のいそがしいざわめき」の方が好もしいた。ちたので、かう答へた。「好いございます——しかしフリート街には敵ひませんね。」デョンスン、「君の云ふ通りだ。」

私は多くの讀者諸君が、私の没趣味を非難されるだらうといふことを知つてゐる。しかし、私は華やかな社會の大通人である某從男爵（バロネット）の權威の下にかくれるとしよう。彼は田舎の五月の夕べの香はしさに注意をうながされた時から云つた、「これも結構だ。しかし僕としては芝居小舎の炬火の臭ひの方が有難い。」

私の友人サー・マイクル・フレミング……彼は或る日デョンスン博士について、かういふうまいことを私に云つた、「あの人には、あらゆる場合に一種ぶつきら稀な氣品がある。」

私たちはグリニツチに長くどまり過ぎたので、ロンドンに歸らうと河を遡つたときには、迎も朝ほど愉快にはいかなかつた。それは夜の空氣が非常に冷たかつたからで、私は身震ひをした。私は昨夜、保存して置きたいと思ふことを憶ひ出しては日記に記入するために徹夜したので、尙更寒さがこたへた。デョンスンとの交際の最初に於て、私はよくかういふ骨折りを厭はなかつた。一週間に四晩も徹夜して、晝間は差障りを感じなかつたのを記憶してゐる。

頭丈な體軀を有するデョンスンは、少しも寒さに辟易せず、私が慄へるのを、以ての外の柔弱と云はぬばかりに、「君は何故慄へるのだ？」と叱つた。民法博士會院のサー・ウィリアム・

スコットは、デョンスンと共にスコットランドに旅行したとき、驛馬車の中で頭痛を訴へたら、「おしは君くらゐの若さで頭痛なんか知らなかつたよ。」と同じ流儀であしらはれた、と私に語つたことがある。われ／＼自身が現在感じてゐない症状に對して他人を思ひ遣ふことは容易でない。健全な時と病氣の時とで、身邊の人間の訴へに動かされるのがどんなに違ひがあるかは誰しも思ひあたることであらう。十分健康な時には、相手が大へん苦しんでゐるとは中々考へられない。われわれの想像の中の、苦痛の心象がしかく稀薄なのである。病氣で心が折れてゐる時には、われ／＼は一も二もなく他人の憫みに同情するものである。

われ／＼は「タ・クス・ヘッド」珈琲店で大へん睦まじく此の日の行樂をむすんだ。彼は、私がか家門の話やその相傳の領地についてこま／＼語るのに喜んで耳を傾け、その領地の廣さや人口について、質問したり胸算用したりした。同時に、地主は神の攝理によつてその人々の上に立つやうにされたのだからとて、借地人に對して、寛大なる深切心を示すことを勸告した。彼は又、私の先祖のロマンティックな居城の話聞いて喜び、「おしは是非そこに往つて見よう。われ／＼はその古い城の中で暮して見よう。もし城の中に部屋が残つてゐなかつたら一つ造ることにしよう。」と云つた。私は大いに光榮に感じたが、その時はアフレックが實際に彼の訪問を忝くし、後に彼の『西部諸島旅行記』中の敘述によつて、名を揚げることにならうと迄は望み得なかつた。話が又もや私のオランダ行きのこととなつた後、彼は云つた。「おしは君が英國を離れるのを是非見送りたい。ハリツチまで一しよに行かう。」

翌七月三十一日（日曜日）、私はその朝クエイカー教徒と呼ばれる人々の集會に列席し、一人の婦人が説教するのを聞いた話を彼にした。ジョンスン、「君、女が説教するのは、犬が後肢で歩くやうなものだ。うまくはないが、とに角、やつてのけるといふだけで驚くに値ひする。」

八月二日（火曜日）、ジョンスン博士は朝の一時を私の部屋で過ごす光榮を與へてくれた。「私のロンドン出發の日が五日と定まつたので。彼は、「自分はしよつ中何にもしないで居たいといふ氣持になる。」と云つた。私は、英國中で一ばん怠惰な人が『英語辭典』といふ一ばん骨の折れる著作をしたと思ふと不思議でならない、と云つた。

私は今や、特權をもてる人たる資格をかち得てゐたので、この晩、彼に伴はれてウィリアムズ嬢の許に茶を飲みに行つた。この人は不幸にして失明してゐたが、氣持のよい話相手であることを私は發見した。彼女は各方面の學問に心得があり、云はんと欲することを巧みに云ひ表したからである。しかし彼女の特別の値打ちは、ジョンスンと長い間親しく暮したといふことで、それがため、彼の習慣をよく心得て居り、如何にして彼にしやべらすべきかを知つてゐた。

お茶が済むと彼は、自分の散歩道と稱する、直き近所にある、幾らかの木立ちの繁つた、細長い舗装された袋小路に私を引つづつて往つた。そこで二人は可成り長い間ぶら／＼した。私は、ロンドンを愛し、彼との交際を好むあまり、一般に若い者が大いに希望する旅行のために出かけるのだが、何だか氣が進まなくなる、と彼に訴へた。彼は雄々しい、元氣な會話を私を鼓舞した。彼は、外國の何處に於いても、身を落着けたら、知識を求めめるために専心學び、又、毎日一時間ギ

リシア語を學ぶやうに、それから、あつちこち動き廻つてゐる時には人類の偉大なる書（譯者註、聖書を熱心に讀むやうに私に忠言した。）

八月五日（金曜日）、朝早くわれ／＼はハリツチ行ききの驛馬車で出發した。客のうちで、肥つた、年輩の、身分ある婦人と、若いオランダ人が一ばん話し好きらしかつた。われ／＼が或る旅館で晝食をした時、その婦人は、自分は子供を教育するのに全力をつくしたといふこと、そして特に、彼等が一瞬間たりとも怠けて過ごすのを許さなかつたといふことを話した。ジョンスン、「奥さん、わしも奥さんに教育して戴きたいものですな。わしは生れてこの方、怠け通して來たのですから。」彼女は云つた。「あなたは屹度怠け者でなんか、おありにならなかつたと思ひますわ。」ジョンスン、「いや、奥さん、ほんとのことを申して居るのです。それから、そこにゐる紳士——（と、私の方を指さしながら）——も怠け者だつたのです。あの男はエディンバラで怠けました。父親は彼をグラスゴーに送りましたが、そこでも相變らず怠けました。次にロンドンに來ましたが、そこでも大へんに怠けたのです。今度彼はユトレヒトに行くところなんですが、其處でも大かたこれ迄通りに怠けることでせう。」私はこつそり、ジョンスンに、どうしてそんなに素つぱ抜きをするのか、と云つた。ジョンスン、「フフフ。みんな、君のことは、何んにも知らないあかの他人だ。直きに忘れてしまふよ。」……彼は決して吝嗇ではなかつたが、一般に正當な態度をとらうといふ注意は甚だ周到であつた。或る驛場で私が馭者に一シルリングを、これ

見よがしに與へたのを見ると（乗客は一人について六ペンスだけ與へるのが慣はしだつたのに）、彼は私を脇へ連れて行き、君の行ひは馭者をして、普通額だけしかくれなかつた、すべての他の乗客に對して不足を感じしめる、と小言を云つた。之はもつともな非難であつた。われ／＼は自分の金を費ふのに、どういふ風に自分の寛大さ乃至虚榮心を満足させようと勝手だとはいふもの、他人のことも考慮して、恆久的需要のある物の價格は釣り上げないやうにしなければならぬ。彼は、ブラツクロック氏の詩の中で、眼に見えるものを描いた所について論じ、かう云つた、「作者は不幸にして盲人であつたから、かういふ所は、眼の見える他の作家の作品を記憶してそれをつなぎ合せたものであることは、絶対に確實である。あのスペンスといふ馬鹿は、ブラツクロックが、不可能なことを自己の機能によつて爲し遂げたかも知れないといふことを、理論的に説明しようと骨を折つた。問題の解決は今云つた通り明白だ。假りに、足が悪くて絶対に動くことができない男がゐたとしたまへ。わしが、その男が今まで居たのと別な部屋にゐるのを見出したとする。わしは、その男の筋力が、何か測り知るべからざる變化によつて忽然として働き出したのかも知れぬなどと、馬鹿げた想像を廻らすだらうか。そんなことをするものか。その男がどうして別の部屋に這入つたかは明白だ。誰かが、彼を運んだまでだ。」

コルチエスターで一と晩泊つたが、デヨンスンはこの町がチャールズ一世のために攻圍に堪へたことを敬意を以つて語つた。……

その夜、晩飯のとき、彼は大へん愉快さうに御馳走の話をはじめた。曰く、「世の中には自分

等が食べる物に注意しない、或ひは注意しないふりをする、愚かな人々が居る。わしは、入念に細心に、わしの口腹を顧慮する。自分の口腹を顧慮しないやうな者は、恐らく他のことも一向顧慮しないだらうからね。」彼はどうやらデヨン・ブル式哲學者のやうに見え、暫くは眞剣であるばかりでなく猛烈でさへあつた。しかし私は、彼が別の場合に、自分の口腹の欲を満足させるに汲々たる人々を大いに輕蔑するのを聞いたことがある。しかのみならず、彼の『ラムブラー』の第二百六號は貪食を排する名論である。が、彼の實際の行ひは、この問題についての彼の相矛盾する意見の一方に片寄つてゐたと認めざるを得ない。即ち彼ほど御馳走を好んだ人を私は曾つて見たことがないのである。食卓につくと、彼は當面の仕事に全然心を奪はれてしまふ。彼の眼は自分の皿に釘付けにされたやうである。又よほど身分の高い人と同席でない限りは、自分の食欲を満足させてしまはぬうちには、一言も發せず、他人が何を云はると耳を藉さうとさへしなかつた。而してその食欲たるや頗る旺盛で、且つ猛烈に發揮されるので、彼が食つてゐる間にはその額の血管は怒張し、又大概著しい發汗が見受けられた。これは繊細な感覺を有する人々には不快に見えざるを得ない。又、人一倍自制力に富んで居るべき思想家の品格には、確かにあまりふさはしいものではない。しかし、デヨンスンといふ人は、飲食の執れに於いても、嚴重に禁欲的であることはできたが、節制的ではなかつたと云はざるを得ない。彼は禁欲することはできたが、適度に用ふることはできなかつた。彼は二日間斷食したが何等困らなかつたと私に云ひ、又、空腹を感じたことは一度しか無いと云つた。彼があらゆる場合に、御馳走が氣に入りさへすればどんな

に澤山食ふかを目撃して驚いたことのある者は、彼が空腹と稱するのはどれ程のものであるか、見當が付き兼ねる。彼は又、食ふ量が素晴らしかつた點で非凡であつたのみならず、料理術の精妙な鑑識家であつた——或ひは、さう自任してゐた。自分が正餐又は晚餐をした所で出されたものもろの料理について批評を並べたて、どれが旨かつたかを詳細に回想することがよく有つた。私はかういふことを憶へてゐる、——彼がスコットランドに往つた時、「ゴードンの食味」(オノラブル・アレクサンダー・ゴードン家の御馳走)を褒めたが、その褒め方たるや甚だ熱烈で、もつとずつと重要な題目にふさはしいものであつた。「マクローリンの擬ひものの取合はせ料理に至つては以ての外だ。」ほど同じ頃のこと、彼は或る貴族の、フランス人の料理人が作つた料理に非常な不満を感じ、「こんな怪しからん奴は川に投げこんでやりたい。」と猛烈な勢で叫んだ。そのあとで、彼は次のやうに自分の技術を宣傳することによつて、これから晚餐に招かれることになつてゐる家の夫人に恐れを拘かしめた。「奥さん、わしは各方面の旨い料理を食ひつけてゐるので、相當の料理人を拘へてはゐるが大概自宅で暮してゐる人たちよりは、料理の良し悪しを判断するのはずつと巧者ですぞ。さういふ人たちの味覺は、何時の間にか自分の料理人の好みに馴らされてしまふものです。ところが、奥さん、わしはもつと廣い範圍にわたつて試食してゐるから、もつと巧者に判断できるわけです。」正餐に招かれたときは、それが親友の所であつても、何かお惣菜よりは上等なものが彼のために用意されてゐないと、彼は喜ばなかつた。「これは勿論結構な御馳走だつた。しかし、わざわざ客に来て貰ふほどの御馳走ではなかつた。」一方、我

が意を得た御馳走にあづかると、彼は非常な喜びを以て満足の情を表すのが常であつた。或る日、ポールト・コート、彼の隣人であり家主である印刷業者、アレン氏の許で正餐の饗應を受けた時(そのこの老いた家政婦は彼の嗜好を餘蘊なく調べて置いたのである)、彼はかういふ推稱の辭を呈した。「實際、料理人の大會議を開いてもこれ以上立派な料理は望まれないわい。」

——さて、例のオランダ人が寢室に退き、われ／＼二人きりになつたとき、ジョンソンは、多くの人が人にも勧め、自らも實行する、例のわざとらしい身のとりなし方について語つた。彼はそれに不賛成を唱へたのであつた。曰く、「わしは、眞面目な人間にならうか、それとも、愉快な人間にならうか、と考へこんだことは無い。たゞその時々々の傾向に任せただけだ。」

彼は、來年の夏にはオランダにやつて来て、私と一しよにオランダ國內の周遊をするかも知れない、と云つて私を喜ばせた。

私はいろ／＼と前途に不幸を想ひゑがいて彼を困らせた。一匹の蛾が蠟燭のまはり羽ばたいてゐたが、やがて焼け死んだ。彼はこの小さな出來事を捉へて私を諭した。こすい目附をしたがら、おごそかな、しかし、もの靜かな調子で彼は云つた。「この蟲は我とわが身を苛んだ。その名は大かたボズウェルといふのだらう。」

翌日晝飯時に、われ／＼はハリツチに到着した。そして、ヘルヴェツルイスへ渡る郵船の切符も買へ、荷物も積みこめたので、われ／＼は二人だけで旅館で晝食をした。私は不圖、彼がロンドンに歸る便宜が急に得られなくなつて、こんな退屈な土地に閉ぢこめられることとなつたら、「堪らな

「いだらうと云つた。ジョンソン、「些細なことに大仰な言葉をつかふ癖をつけたまふな。わしが暫く此所に引止められたとしても『堪らない』ことなんかないだらう。」不釣合に大袈裟な言葉つかひをする慣はしは、確かに到る處であまりに頻繁に行はれてゐる。しかし、それはフランス人の間に於いて最も著しいと思ふ。フランスを旅行した者はその實例を無數に氣づいたに違ひない。われ／＼は教會に見物に往つた。中に這入り聖壇の前まで歩み寄ると、何時も渝らず熱烈な信心を有するジョンソンは、私を膝まづかせて、かう云つた。「君は今、故國を去るところだから、君の造り主、救ひ主の加護を祈りたまへ。」

教會を出た後で、われ／＼は暫くの間、監督ビショップパークレーの、物質の非存在と、宇宙のすべての物は單に觀念的のものに過ぎぬ、といふことを證明するための巧妙な詭辯について立話をした。私は、われ／＼は彼の説が眞實でないことは承知してゐながらも、それを反駁することは不可能であると云つた。私は此の時の、ジョンソンの間髪を容れざる答へつづりを何時までも忘れ得ないであらう。即ち、彼は大きな石に自分の足をえらい勢で打ちあてて反動をくひながら、「わしはかうやつてそれを反駁する」と云つたのである。

わが尊敬する友は私と一しよに濱邊まで下り立つた。その場で二人は相擁して懇ろに別れを告げ、且つ手紙で消息を通はさうと約束した。私は云つた。「先生、私の留守中に私のことをお忘れにならないで下さい。」ジョンソン、「いや、君、わしが君を忘れるよりは、君がわしを忘れることの方が有りさうだね。」船が動き出したとき、私は可なり長い間、眼を彼の上に注いでゐた。

彼の方はいつもの癖で、その偉大な體を揺りながら立ちつくしてゐた。到頭、私は彼が町の方に戻つて行くのを認めた。そしてその姿は消えてしまつた。

ユトレヒトは、始め、大へん退屈に思へて、ロンドンの活氣に充ちた場面の後なので、私の精神はひどく減入つてしまつた。そこで私はジョンソンに、泣き言を並べた、意氣銷沈した手紙を書き送つたが、彼は相手にしなかつた。後日、もつとしつかりした氣分を取り戻した時、私は再び手紙を書いて、消息を洩らして戴きたいといふ切望を通じた。遂に私は左の手紙を得た。それは私にとつて大へん有益なものであつたが、他の多くの人々にとつても同様であらうと信ずる。

「ユトレヒト、ラ・クール・ド・ランブルールに於いて、
ボズウエル様

拜啓 小生から手紙が参らぬからとて、忘れられたとか、怪しからぬ無視を蒙つたとか、お思ひになつてはいけません。小生は友人に會つたり、彼等からたよりの受けたり、彼等に話しかけたり、彼等の噂をすることを好みます。しかし、いざ筆をとつて手紙を書かうといふ氣になるには、相當の努力を以つて決心しなければなりません。しかし小生は何か重要な義務とか本當の深切なる配慮とかを缺いてまで自分の物臭ところを満足させようとは思ひません。

小生の身體の工合が良いとか悪いとか、田舎に往つて來たとか來ないとか、お別れに貴君と坐つた部屋で貴君のために乾杯したとか、君の知人は變らぬ友情を以つて始終貴君の噂をしてゐるとか、通常、たゞ書かんがために書かれる手紙の中に並べられるやうな話題には、小生はどうも

通信する價值を認め難いのです。しかし、小生に、何等か惱ましき焦燥を鎮め、道念を奮ひ立たせ、重要な見解を匡正し、高尚な決心を堅めしめる、といふやうなことが出来得るのならば、抑も貴君ほどには尊重してみない友人のためにでも、無爲徒然の沈鬱な閑寂を棄ててその人の望みを満足させる喜びを、少くとも欲するものであることはお信じになつて間違ひありません。但し、小生が容易にきちん／＼と通信するやうになるかどうかは受け合へません。差しあたり、貴君から戴いた二通に對してこの手紙を受け取つて戴くつもりです。貴君の初めの手紙は、あまりに絶望的な心境か述べてあるので、どう返事のしやうも無く、又、それに値ひしなかつたのです。二度目の御手紙は大いに小生を喜ばせました。貴君の心が着實に合理的に、何か有益な研究に引つゞいて打ち込まれてゐることを示すやうな、研學上の進度の報告が有れば、小生は尙更喜ばしく存するでせう。

貴君は恐らく小生がどういふ研究を勧めるか、それを知りたく思はれるでせう。宗教のことは申しますまい、貴君が神の意志を知らうと努めるべきか否かは、改めて問題とすべき事柄ではありますまいから。

ですから、只われ／＼がやつてもよいし、やらなくても差支へない研究だけを考慮して見ませう。さて其の中で、御尊父が勧められる民法と、貴君自身が思ひ立たれた古代語を研究する、といふより一層良い選擇が有り得ようとは思へません。少くとも貴君が一定の居所に在る間は、毎日幾時間かを貴君の書物の中で過こすやう決心なさい。貴君の訴へらるゝ思慮の散亂は、いろいろ

ろの動機の間の中ぶらりんになつて居て、どれかの動機が強くなつたり弱くなつたりするにつれて方向を變へるところの、心の動搖に他なりません。若し貴君が何か強い欲望を心に燃やすことができるならば、若し貴君が何か一つの卓越、又は、技能に對する望みに充たされてゐるならば、思ひ迷ひの風雨などは、貴君の行爲に何の影響も及ぼさず、大抵は記憶にも何の跡形も止めないで、消えて無くなるでせう。

恐らくすべての人間の心には、優越に對する欲望が潜んで居り、それが各人をして、天は何か獨特なものを自分に賦與してゐるのだらうと、始めは希望し、次いでさう信ぜしめる傾きがあります。この虚榮心は、或る心には物事を嫌惡する心を培はしめ、或る心には欲望を起さしめますが、それ等は人工によつて元來の力より遙かに増長します。而して假裝は、時がたつにつれて習慣となつてしまふものですから、それ等は、最初たゞ見せかけのためにそれ等を増長せしめた、本人に對して壓制を加へるに至ります。すべての欲望は、冷たい間はおとなしく懐ろに抱かれてゐたが、燉められて元氣づくくと人を咬んで毒を注いだといふ蝮のやうなものです。御承知の或る紳士は、享樂の渦巻を泳ぎ廻らうといふつもりで、華やかな世間に始めて足を踏み入れた時に、全然の無頓着と全般的の懈怠を、若い者に最もふさはしい附隨物であり、潤達な氣象と鋭敏な理解の最も疎かな表れであると考へました。あらゆる目的に無關心であり、あらゆる衝動に敏感である彼は、少しでも勤勉に見えることは天才の評判を多少でも割引されることになる、と考へました。そして、無節度の安逸さと享樂の渦のたゞ中で、凡庸な人間ならば、黙々たる専念と孤獨

の勉強によつてのみ得られるやうな知識と藝能を、手に入れたと他人に見られようと望みました。彼はかういふ生き方を暫く續けましたが、彼の良識と善徳の故に、それに倦怠を覚えて來ました。ところが、長い間の怠惰と享樂の習慣が、思つたより改めにくいのを發見し、さりとて自分が何か非凡の特性を授かつてゐるといふ自惚れは棄てたくないもので、有りふれた放縱の結果を、何か運命の抗しがたい配劑といふ風に解し、天は元來自分を合理的の仕事に不向きに作つたのだ、と結論したのであります。

右のやうな、取りとめの無い、有害な空想は、向後一切君の心から一掃してしまひなさい。決心し、その決心を守りなさい。選擇し、その選擇を追求なさい。貴君が今日を勉學に費やすならば、明日は一層よく勉學できることを發見するでせう。とは云へ、貴君が一舉にして完全な勝利を収めることを期待し得るとは申しません。悪い癖はさう簡単に征服できません。決心は時々弛み、勤勉には折々邪魔が這入ります。しかし、思ひがけぬ不意打ちや、長かれ短かれ、道草があつても、そのために落膽してはいけません。それ等の障害は人間全般に免れがたいものと考へなさい。投げ出した所から再び遣り出さなさい、そして前回貴君を打ち負かした誘惑を避けようと思ひなさい。

ボズウェル君、以上は多分貴君が屢々受けたことのある——そして貴君が用ひなかつた——忠告かも知れません。しかし、この忠告は、よし貴君が他人からは受くるをいさぎよしとしなくても、貴君にして、惠み深い攝理が貴君を招いた位地に附隨する義務を果さうといふ志が有るならば、自ら省みて採用せざるを得ないものであります。

できるだけ早く、長い手紙を下さい。貴君が日記を書きつゞけ、現在住んでゐる國についての觀察を多く書き入れることを希望します。フリーズランド語について何か書物を送つて下されば、それから、オランダでは貧民扶助がどういふ風にされてゐるか、お調べ下されば有難く思ひます。敬具

ロンドン、千七百六十三年十二月八日

サム・ジョンソン

千七百六十四年、年齢五十五歳、——千七百六十四年の初めに、ジョンソンはラングトン一家をリンカンシア州のラングトンのその屋敷に訪れて、暫く滞在し、大いなる満足を得た。彼の友ベネット・ラングトンは必ずや、出來得るかぎりの心づくしをしてこの高名なる賓客の居心地を良くしたことであらう。又老ラングトン氏及びその夫人も、十分彼の價値を理解することのできた人々であつたから、もてなしに事欠くことはなかつた。しかし、彼はかういふ話を私にしたことがある、——老ラングトン氏は相當學識のある人物であつたが、彼が時々やる「大ざつばな話しぶり」に對し酌量することを知らず、彼が話の序でにローマ教會の特殊な教義に味方するが如き口吻を洩らしたといふので、彼のことを、この宗旨の人間だと思ひこんだまゝ墓まで往つてしまつた、といふのである。

彼は世事に處するに甚だ氣輕で、ある時、ラングトン氏と二人で驛馬車に乗つてゐると、ラングトン氏が氣分が悪くなつたと云ひ出したので、彼は、外に出て、馬車の背部の露天の所に坐らうと説いて、さうした。その様子がいかにも奇妙に見えるのを自分でも知つてゐる彼は、一人の田舎者が畑に立つてゐるのを見ると、「今の男は多分、もしあの二人の氣狂ひが降りて來たら、どうしたらよからう？」と氣を揉んでゐるだらう。」と云つた。

彼がロンドンに歸つて（二月のこと）後間もなく、長い間無名のまゝで存在し、ギャリツク氏の葬儀の際『文學俱樂部』と判然名乗りをあげた、あの俱樂部が設立された。サー・ジョン・ア・レノルツが最初の提唱者たる名譽を有し、ジョンソンが之に賛成したのである。當時の會員はサー・ジョン・ア・レノルツ、ジョンソン博士、エドマンド・パーク氏、ニューデント博士、ボークレア氏、ラングトン氏、ギールドスミス博士、チャミア氏、及びサー・ジョン・ホーキンスであつた。彼等は毎週一と晩、七時にソホーのデファード街の「タークス・ヘッド」で集り、大概可成晩まで話しつゞけた。この俱樂部はその後段々大きくなり現在の三十五人といふ會員數となつた。約十年後に、議會の會期中は、毎週晚餐する代りに二週間に一回正餐を共にすることに決定された。彼等の當初の料理店が私人の宅となつてしまつたので、彼等は先づサツクヴィル街の「プリンセス」に、次にはドーヴァー街の「ル・テリアズ」に移り、現在はセント・チェームズ街の「バーズローズ」で集つてゐる。

サー・ジョン・ホーキンスは、この會の「脱退者」であると自稱し、その脱退の理由として、

夜晩くなるので家庭生活の極まりに差し障るからだ云つてゐるが、それは真相ではない。實のところは、彼が或る晩パーク氏を大變亂暴に攻撃したので全會員悉く憤慨の意を表明し、次の會合の際、再び顔出しが出来ぬほどの冷遇を與へたのであつた。

ギャリツク氏について、彼の云つてゐることも同じく間違つてゐる。彼はかう云つてゐる。「ギャリツク氏は、われ／＼の仲間に少しでも加入する意志があることを仄めかしさへすれば早速入れて貰へる。信じてゐたが、それは考へ違ひであつた。このことについてジョンソンは私に相談した。私が、彼を迎へるについては別段異議を見出し得ない、と云ふと、ジョンソンは、あの男は例の馬鹿ぶさけをしてわれ／＼の邪魔をするのだらう」と叫んだ。そして、後に彼が正式に推擧されないやうに計らつたので、結局彼は入會を許されなかつた。」

ギャリツク氏とジョンソン博士の雙方のために、私はこの誤傳を訂正する必要があると思ふ。事實はからなのである、——われ等の俱樂部の組織後まもなく、サー・ジョン・ア・レノルツはギャリツクにその話をした。すると彼は、「大へん結構なことだと思ふから私も仲間入りをしよう」と云つた。サー・ジョン・ア・レノルツがこの言葉をジョンソン博士に傳へると、博士はこの俳優の高慢さを甚だ憚ばなかつた。ジョンソンは云つた、「私も仲間入りをしよう、だつて？ 一體、彼は、われ／＼が彼に入會を許すかどうか判つてゐるのか？ 英國第一の公爵だつてそんな云ひ方をする權利はないんだ。」しかし、かういふ風に一時はその横柄ぶりを怒つたものの、後にギャリツクが正式に推薦された時には、ジョンソンはそれを熱心懇切に支持した。従つてギャリツク

は會員に選ばれ、最も愉快な會員として死に到るまで引つゞきわれ／＼の會に出席した。

國王の御寛仁によつて漸く達し得られた安樂と獨立は、ジョンソンの生來の懶惰を増長せしめた。彼はその『冥想録』に於いて自らかう責めてゐる。「千七百六十四年四月二十日、基督受難金曜日。余は何等の改善をもなさなかつた。余は全然無爲に過こし、一層肉欲的妄想に陥り、一層酒に耽つた。」次の朝にはかう痛切に嘆じてゐる。「この前聖餐を戴いて以來、わが疎懶は一層甚しい沈滞に陥り、わが放縱は一層甚しい怠慢に増長した。わが想念は肉欲により曇らされた。又、本年初めより幾分、強烈な酒類を過度に攝ることを禁じた以外には、わが嗜欲は理性を支配した。一種奇妙なる忘却が余を襲ひ、そのため昨年のごとがどうであつたか判らない有様である。また、事實や知見が何等の印象をも止めずに余を過ぎゆく有様であることを認める。」その後で彼は嚴かに「これは、天國がそれに對して約束された生活ではない」と云ひ、眞劍に改善を決心してゐる。

彼は一定の日を敬虔な默想に過こす慣はしを有してゐた。即ち元日、妻の忌日、基督受難金曜日、復活祭、自分の誕生日、である。此の年、彼はかう云つてゐる。「余は既に五十五年を決心をするに費してゐる。ほとんど余の記憶し得る最初の年頃から、より善い生活への計畫を作つてゐたのであるから。余は未だ何事も爲してゐない。今は正に爲さざるべからざる時である。爲すべき時は残り少いだから。おゝ神よ、イエス・キリストのために、余をして正しく決心し、

その決心を貫くを得しめたまへ。アーメン。」

かういふ敏感な良心、かういふ熱烈な求道心は稀に見るところであらう。精神的向上心を冷却しつくした者共が、ジョンソンのこの敬虔なる熱情をあなどるのは確かに宜しからざる態度である。

この頃、彼は日頃潛伏してゐた憂鬱症の激烈な再發に悩まされた。症状は甚だ重く、交際の大好きな彼が全く社交を厭ふに至つた。それはこの病氣の最も重大な徴候であつた。アダムス博士が私に語つたところによると、博士は昔からの友人として訪問を許されたが、往つて見ると、彼は溜息をつき、呻り、獨り言を云ひ、部屋から部屋をそわ／＼歩き廻るといふ、傷ましい状態であつた。その時、彼は自分の感じてゐる惨めさをかういふ強い言葉で云ひ表した、「わしの氣分を恢復できるのなら手足の一つづらゐり切斷して貰つてもいい。」

獨り言を云ふことは、私が彼に會つた當初から、彼の癖の一つであつた。彼が屢々信心深い叫びを發したのは確かである。「主の祈り」の斷片が幾つかはつきり聞きとれたことがあるからである。彼の友トマス・デーヴィス——チャーチルはこの人について

「かのデーヴィスは、いとうつくしき妻を有す。」

と云つてゐる——は、ジョンソン博士が「われ等を試みに遣はせたまふこと勿れ」と呟いた時、滑稽な、女性の御機嫌をとるやうなふざけ方で、「ねえお前、お前が罪をつくつてゐるのだよ。」と自分の妻に云つたものである。

彼はも一つ奇癖をもつてゐたが、それは彼の友人の何人も、それについての説明を求めるところを敢へてしないものであつた。それはすつと昔にとり憑かれた迷信的習慣らしく、彼が理性に訴へてそれから脱しようとしなかつたものらしかつた。即ち彼は一定の地點から一定の歩數でドア又は出入口を出て或ひは這入るやう——少くとも、彼がドア又は出入口のそば迄來た時に、右足だか左足だか（どつちだかは詳かにしない）が何時も實際の第一運動を起こすやう——大いに氣をつかつて努めたのである。——さう私は推測する。何故なら、私は何回となく、彼が突然立ち止まり、それから非常に眞面目に自分の歩數を算へてゐるやうな様子を見たことがあるからである。それから、この魔術めいた行動を忘れたり間違へたりした時は、元の場所に立ち歸り、この儀式を始めるために型のごとく姿勢をとるのへ、それをし終ると、やつと我に返つて、足早やに歩いて連れのを追ひつゝのを見たのである。彼がスカイ島に往つた時は、馬上に於いてさへ、かういふ性質の奇妙な一例が行はれた。サー・デヨシユア・レノルヅは、彼がレスターフイールヅの或る細路を通り抜けないで、態々可成りの廻り路をするのを見たことがあつた。が、サー・デヨシユアは、彼がこの路に關聯して何か不快な記憶を有してゐたせいであらうと解した。

極めて些細なことながら彼の風采態度のうちで人目につく點をあまざす擧げるならば、次のやうなことも述べて置かねばなるまい。——彼は椅子に倚つて話するとき、或ひは思案に耽るときでさへも、頭を右肩の方に傾けてふる／＼顫はせ、又、身體を前後に動かし、同時にその左膝を手の平で同じ方向に擦るのが常であつた。また言葉を發する合間合間には、口で色々な音をさせた。

或る時は反芻——所謂食ひもどし——するやうな音をたて、或る時は半ば口笛を吹くやうな眞似をし、或る時は牝雞がくつ／＼と鳴くやうに舌を口蓋から後方にはね、或る時は早口にツーツーと云つてゐるやうに舌を、前の上は齒の齒齦にあてて突き出したりする。さうしながら考へこんだ顔附であることもあるか、にや／＼笑つてゐることの方が一層多い。一般に議論が一段落になると、その猛烈さと聲高さのために、いゝ加減疲れてしまつて、鯨のやうに息を吹き出すのが常であつた。これは肺臟の息抜きであるらしかつたが、又彼の相手を馬鹿にする表現法の一つのやりにも見え、相手の議論を風の前の糞殻のごとく吹き飛ばしてしまつた、といふ趣きがあつた。

私は今こゝに、正確な似顔の面白味を解しない輩の嘲笑に持つてこいの例を提供してゐることをよく承知してゐる。しかし正確な似顔を完成するためには、それを描くものは極めて些細な筆觸を輕んじてはならないのだ。が、どうでも、小賢しい人々がこの記述を攻撃しようといふのならば、其の際私がこゝに述べた辯明の言葉をも引用するだけの雅量を示して貰ひたい。

千七百六十五年、年齡五十六歳、——千七百六十五年の始め、彼は友人ボークレア氏とケムブリッヂ大學を一寸訪問した。千七百八十五年三月の『紳士雜誌』にはこの訪問の折りの彼のふるまひについて、キビ／＼と鮮やかな敘述が載つてゐる。これは故デヨン・シャープ博士よりの手紙の抜萃である。そのうち、次の二つの文章は甚だ特色あるものである——

「彼は私とお茶をがぶ／＼と澤山飲み、その間、之に交ふるに多くの怒りつばい反駁と多くの高邁な襟懷を以てした。」トトリニテイに於ける最後の晩には、五六の人々が彼と一座した。夜半頃に及んで、彼は意氣あたるべからざる概を示した。氣の毒なマコーレイ夫人を眼もあてられぬ迄にやりこめたが、そのあとで彼女のために一同に乾杯を求め、なみ／＼と二杯まで彼女のために飲み乾した。」

チヨンスンほど、恩義を深く感じた人はあるまい。些細なことであるが、この年の彼の日記にはさういふ美しい半面を示す事實がある――

「七月二日、余はシムブスン氏に十ギニーを返済した。それは昔、余が困つてみた時に貸してくれたもので、テイも感謝してゐた。」

「七月八日、余はシムブスン氏に更に十ギニーを貸した。」

即ち、彼は昔受けたのと同じ深切を舊友に與へる、といふ愉快な機會を得たのである。實際彼は並はづれて金ばなれが良かった。彼の日記の次の事項はかうであつた、――

「七月十六日、余は七十五磅を受領した。デーヴィス氏に二十二磅を貸す。」

ダブリンのトリニテイ・カレッジはこの頃、學界最大の名譽を自發的敬意のしるしとして彼に與へて、之を驚かした。即ち彼を法學博士としたのである。……求められざるに、この名譽のしるしをかういふ偉大な文豪に與へたといふことは、この學府の批判力と寛大な精神にほま

れあらしむるものであつた。

この年はチヨンスンが英國の最も著名な醸造業者の一人であり、サザツクの町邑選出の國會議員たるスレール氏の一家に紹介されたといふ點で重要である。外國人は、醸造業者や溜造業者や、その種類の商賣に従事する人々が大へん重要な人物として立てられるのを聞くと、少からず意外に思ふ。しかし、我が國の如き偉大なる商業國に於いては、多大の富を生む地位が尊敬を受けるのは當然のことである。且つ、正直な産業が、尊重される權利を有してゐることは疑うべくもない。が、恐らくは、低い素性の人間があまりに速かに成り上ることは、偉大な從屬關係を支持する助けと常になつてゐた、門閥の生れといふ身分の價值を減ずる傾きがあらう。チヨンスンは、スレール氏の父の成り上つたことについて、次の話をよくした。「彼は、後に自分のものになつた大醸造所で、二十年間、一週六志^{シムブスン}で働いた。工場の主人には獨り娘が有つて、それが或る貴族に嫁いでゐた。貴族がこの仕事を繼續するのは穩當でなかつた。で、老父が死んでしまふと醸造所は賣られることになつた。そんな大きな資産の買取人を見出すことは困難なことであつた。そこで暫くして後、この工場の使用人である、頭の良い、活動的で正直者のスレールと交渉して、資産を擔保にとることにして、三萬磅で全部を彼に譲ることにしたら良いだらう、といふことになつた。そしてその通りに取極められた。十一年でスレールは買ひ取つた値段を支拂つてしまつた。彼は大身代を獲得し、サザツク選出の國會議員とまでなつた。しかしながら、特筆すべきこ

とは、彼が富を用ふるのに鷹揚であつたことである。彼は自分の息子と數人の息女に最善の教育を與へた。彼の立派な行ひは、その舊主人の娘の嫁ぎ先きなる貴族の尊敬を博し、そのおかげで世間で大いに重んぜられるやうになつた。彼の息子は學校に於いてもオックスフォード大學に於いても、第一流の青年等と交際した。大學を出て以後、彼が父から受けた仕送りは素晴らしいもので、年額千鎊を下らなかつた。これは老スレールの如く低い身分から成り上つた人としては、珍しい寛大さと思つたらぬ。彼はよくかう云つた。◀うちの伴がわしの死んだ後で、思つた程金がないと思つたら、わしの存命中に随分澤山貰つたことを思ひ出すがいい。▶

息子は富裕ではあつたが、賢くも父の商賣を繼續していつた。それは甚だ大きな規模のもので、一年に一萬鎊の年金とも交換したくないと、彼は何時だつたか私に云つたことがあつた。「それで私が年一萬鎊の収入を得るといふわけではないが、家の財産だからです。」と彼は云つた。この家は息女たちばかり残つたので、この資産は十三萬五千鎊といふ莫大な金額で賣られた。正當な營業で長い期間にはどれほど儲かるかを示す、素晴らしい實例である。

スレール氏は、ヘスター・リンチ・ソールズベリー嬢といふ、ウェールス出の良い家柄の娘で、教育によつて磨きをかけられた、才氣の溢れた婦人を娶つた。ジョンソンがスレール家に紹介されたのは、(それは彼の幸福に大いに寄與するところがあつた)、この婦人がジョンソンの醫咳に接したいと望んだからだ、といふ見方はいかにも有りさうなことでもあり、一般にもさう信ぜら

れてゐる。しかしそれは眞實でない。スレール氏と親交のあつたマーフィ氏が、ジョンソン博士を大へん稱揚したので、一つ引き合せて貰ひたい、と頼まれたのである。ジョンソンはこの話を聞いてスレール家の午餐の招待に應じた。そしてスレール夫妻の待遇ぶりを甚だ喜んだが、夫妻の方でも彼の人と成りてを欣慕し、そのためにジョンソンは繁々この家に招待されるやうになり、遂には家族の一員となつてしまひ、サザックの家とストレッタムの別荘の兩方に、彼のための部屋が提供されることになつた。

ジョンソンはスレール氏を、立派な徳義心をもつた人として、良い學者として、商賣に練達し健全な理解を有し質實で獨立獨歩のイギリスの郷土（ネイティブ）の風格を具へた人物として、心から尊敬してゐた。

この一家のことは、これからもこの書物の中で幾回となく言及されるし、且つ、スレール氏はその夫人に比べると劣つて居り、或る程度まで、問題とするに足らぬ人物であつたといふやうな謬つた考へが専ら行はれてゐるから、ジョンソン自身の言葉の權威によつて、事の眞相を示して置くのが適當であらう。

彼は曰く、「わしはスレール程、自分の妻君と家族に對して、ほんとの主人である者を他に知らない。彼が指一本を挙げればみんな従つてしまふ。彼より夫人の方が文學的才能に於いて優つてゐると考へるのは、とんでもない間違ひだ。彼女の方が口は達者だが、學問は、彼の方が十倍もある。彼は立派な學者だ。彼女に至つては學校の低學級の生徒程度だ。」讀者は當然、この兩人

の風采について多少の敘述を欲せられるであらう。スレール氏は身長高く、體の均整がよくとれて居り、堂々としてゐた。「夫人」、又は「奥さん」(ヂョンスンはスレール夫人をさう呼ぶのを常とした)は、身長低く、肥つてゐて活潑であつた。彼女が暗い色の衣を纏つてヂョンスンの前にあらはれた時、その姿を彼がどういふ風に見たかを、彼女自身が活き／＼とわれ／＼に傳へてゐる、——「だが、奥さんのやうに小つくりな人は、かういふ着物を着るものぢやありません。どの點から見ても不適當だ。考へても御覽！ 昆蟲はみな派手な色を持つてゐるぢやありませんか。」スレール氏は妻君に、招くべき客の選擇、及びそのもてなし方について飽くまで思ふ通りにさせた。彼はヂョンスンを理解し尊重し、始めて近づきになつてから自分が死する日に到るまで、毫も變るところが無かつた。スレール夫人は、ヂョンスンの談話を自身に魅力を感じ、又一方、かくも高名な人の好意を受けてゐるらしい、といふことについて、全く無理もない誇りを有してゐた。

* ビオ、ツイ夫人の「逸話」にある。

この關係は、ヂョンスンにとつて此の上無く幸福なものであつた。彼はスレール氏邸で、人生のすべての安樂と、贅澤さへも、味はつた。愉快な、善くとゝのつた家庭に立ち交はるることによつて、彼の憂鬱症は散せられ、不規則な習慣は矯められた。彼は最大の尊敬を以つて——愛情を以つてさへ、遇せられた。二人きりの時でさへ、スレール夫人の活氣に富んだ文學談は、彼の心を刺戟して愉快ならしめ、活動せしめた。しかし、さういふことは稀であつた。何故ならば、此

の家では彼に最大の樂しみを與へることが、始終續いたからである。即ち、數多い會合に集つて來る、各方面の學者、才人、名士、との交はりには、彼の驚くべき能力を喚び起こし、之等の人々の賞讃は、——何人もそれに無關心で居れないが——彼に満足を感じしめた。

此の年の十月に、遂に彼は自ら編纂するところの『シェイクスピア』を世に出した。假りにこれが、この不朽の詩人の長短を大家の手腕を以つてあげつらつた、彼の序文を生んだ他には取柄が無かつたとしても、國民は何等不足を云ふ理由はあるまい。シェイクスピアの、盲目的、がむしやらの崇拜は、英國民を外國人の物笑ひたらしめた。ヂョンスンは、我が詩人の缺點を率直に認めることによつて、眞に相當する、反對の餘地のない賞讃を彼に與へるにあつた、それだけ一層信用された。實際、シェイクスピアのすべての讚美者のうちで、彼の半分もそれに光榮あらしめた者は無い。彼等の賞讃は、辯護士が事件の、我が側に對してなすそれであつた。ヂョンスンのは、裁判官が下す、眞面目な、十分考量された、偏せざる意見とも云ふべく、重みを以つて肩を出で、尊敬を以て迎へられた。註釋者として彼が爲したところも、少々ならざる價値を有してゐる。但し、詮索の十分と討究の尖鋭といふ點では尙遺憾が有つた。そのことは、彼より後に出た有能で巧緻な批評家の勞力の結果、今日われ／＼に明らかにされてゐる。彼はそれ／＼の戯曲、並びにその獨特な妙味、についての簡約な敘述を加へて、編纂に錦上更に花を添へた。その註釋の多くは、本文中の曖昧な箇所を明らかにし、美しさを以つて鳴る行節を、更に一段と顯著ならしめた。一般に彼は、すべて後來の編纂者を裨益するやうな註釋ぶりを示した。

『シェイクスピア』の序文中で、ジョンソンはヴォルテールを大なる輕蔑を以て扱ひ、その云つた言葉について、「之等は卑少なる才人の卑少なる批評である。」と云つてゐる。ヴォルテールはその返報として、その數多い文學上の奇警な批評の中の一つで、ジョンソンを攻撃してゐる。それを私は讀んだことを記憶してゐるが、彼の龐大な著作には總體の索引が無いので、探しては見当らず、従つて引用することができない。

ヴォルテールは、ジョンソンとしても、相手にとつて不足ない好敵手であると私は思つた。で、私は彼に應戰するやうに説いた。彼は、次第によつてはやつて見ようと云つたが、結局實現はしなかつた。

千七百六十四年と六十五年の兩年には、ジョンソンは彼の『シェイクスピア』の仕事に忙しくて、他の文學的の仕事を一時的の交通さへ——する暇に乏しかつたやうである。彼は二年以上も私に手紙一通もくれなかつた。そのことに對しては、彼が後に陳謝してゐる。

彼の方では長い間無沙汰してゐるに拘らず、私は何か通信する價值のある事が起ることに、彼に書き送ることを怠らなかつた。私は大概、われ／＼の交通を通觀し得るやう、又彼の手紙の中で言及されることの意味が、わからないやうなことが無いやうに、私から彼に送つた手紙の寫し

をとつて置いた。彼の方でも私の手紙の大部分を大へん注意深く保存し、用意周到にも、死ぬ少し前に、それを束ねて封じ、私に送り届けるやうに命じた。そしてその通り、なされたのである。

二月、「千七百六十六年」に、私はロンドンに歸つた。そしてジョンソン博士が、フリート街の「ジョンソンの横町」の、良い家に納まつてゐるのを知つた。彼はウィリアムズ嬢に一階の部屋を與へて住ませ、一方、レヴェット氏は屋根裏に陣取つた。彼の忠僕フランシスはなほ彼に仕へてゐた。彼は私を喜んで迎へてくれた。私が保存した、われ／＼の最初の會話の斷片は、次の如くである。——私は、ヴォルテールが私との會談の際に、ポーブとドライデンの相違を、「ポーブは氣の利いた二頭立ての、立派な輕快馬車を驅る、ドライデンは堂々たる六頭立ての、四輪大馬車を驅る。」と評した話をした。ジョンソンは云つた。「いや、君、ほんとはかうなんだ——彼等は二人共、六頭立ての四輪大馬車を驅るのだ。たゞ、ドライデンの馬は疾驅してゐるか、躓くか、どちらかだが、ポーブのは確實でむらの無い輕駆歩で行く。」彼は又、私の留守中に出版されたゴールドスミスの『旅人』について云つた。「ポーブの時代以來こんな立派な詩は現れなかつた。」

夜は「マイター」料理店で彼と夕食を共にした。初めて會談した場所で舊交を温めようといふのである。しかし今や、彼の生活ぶりには著しい變化があつた。彼は病氣をして、酒を止めるやうに勸告されたので、以來禁酒をつづけ、水カレモネードだけを飲んでゐた。

私は、彼の外國人の友人で、私が海外にあつた時に出遇つた人が、甚しい不信心ぶりを發揮して、無残な暴言を弄して永生の希望をあしらひ「人間は犬のやうに死ぬんだから、犬のやうに横たはればいゝんだ。」と云つたことを話した。ジョンソン、「あの男が犬のやうに死ぬといふのなら、犬のやうに横たはらして置くさ。」私は又、その人が「僕は人間を厭ふ。何故ならば、僕は人間としては最も善い方だと思ふが、自分で自分がどんなに悪いかを知つてゐるからだ。」と私に云つたことを話した。ジョンソン、「あの男が自分のことを最も善い人間の一人だと思つてゐるのなら、随分と變つた意見を持つたものだ。友だちは誰一人さう思つてゐないのだに。」——彼は云つた、「正直な人は理論者たるを得ないであらう。誰でも、キリスト教の證據を公平に調べて見ればさう有り得ないのだから。」私はヒュームの名を持ち出した。ジョンソン、「いや、ヒュームは、ダーラムの監督管區の或る牧師に、自分は新約聖書を注意深く讀んだことは無いと白状した。」私は、すべての幸福な者は同等に幸福である、といふヒュームの意見を持ち出した。舞踏學校の舞踏會に新調の服を着こんで臨んだ小娘も、勝利を収めた軍隊に長たる將軍も、大勢の集會で熱辯を揮つたばかりの雄辯家も、同じことだ、といふのである。ジョンソン、「君、すべての幸福な者は同等に幸福だ、といふのは嘘だ。水呑み百姓も哲學者と同等に満足するかも知れない。しかし、同等に幸福ではない。幸福は、快適な意識の多大なることに存する。水呑み百姓は、哲學者と同等な幸福を有する能力をもつてゐない。」私は、ユトンヒトに於いて、ロバート・ブラウン師がこの問題を非常にうまく譬へて説明したのを思ひ出す。彼は云つた、「小さい

グラスも、大きいグラスも、同等に満たされてあり得る。しかし、大きい方が小さいのより餘計に這入つてゐる。」

ジョンソン博士は、今晚は甚だ懇篤で、私にかう云つてくれた。「君は今や二十五年を生きて來た、そしてそれを善く使用した。」私は云つた。「情け無いことに、さうでなさうです。私は歴史を知つてゐるでせうか？ 數學を知つてゐるでせうか？ 法律を知つてゐるでせうか？」ジョンソン、「いや、君は人に教へる程は、どの科學をも知つてゐないかも知れぬ。又、それで立つ程は、どの職業をも知つてゐないかも知れぬ。しかし、書物及び人間についての、君の全般的知識の量は、どの科學にもせよ、それに通曉し、どの職業にもせよ、それに適する者となることを、君に可能ならしめるよ。」私は、ある道樂者の友人が、法律家になるのは止せ、こつ／＼と奮勉する鈍物に負けてしまふから、と私に忠告した話をした。ジョンソン、「それは君、法律的方面では、奮勉する鈍物が勝つことは決して無いよ。」

私は、立身せんために或る人々が用ふる、有力者の御機嫌をとるといふ方法について語り、先生も身を屈してさういふことをなさつたことが有るか、と訊いた。ジョンソン、「わしは有力者の機嫌をとるほど彼等に接近したことは無いよ。が、如才なく有力者に取り入つて、しかも獨立を失はぬ、といふことも有り得る。自分で悪いと思ふことをしてはいけない、又よく胸算用する必要がある、——自分の得る所に對してあまりに高價を支拂はないやうにな。六ペンス分の利得

に對して一シルリング分の御機嫌取りをしてはいけない。が、六ペンス分の御機嫌取りで一シルリング分の利得が得られるならば、御機嫌取りをしないのは馬鹿だよ。」

彼は云つた、「若し僧院が認められるとすれば、それは公共に奉仕することのできない人々、又は奉仕を終つた人々の隠退所として認めらるべきである。われ／＼の第一の義務は、社會に奉仕することだ。それを爲し終へた後なら、自身の靈魂の救済に全力を注いでもよい。抽象的な信心に對する青年の熱情は、獎勵さるべきではない。」

われ／＼兩人が次に「マイター」で會つたのは、二月十五日（土曜日）で、その時私は古い親友で、當時ケームブリツヂに在住した尊（リチャード）師テムブル氏を彼に紹介した。私は、ルツソーと共にその淋しい隠遁所で暫く過したことを話し、又イタリーに於いて多くの愉快な時間を共にしたウィルクス氏の云つた言葉を引用したので、ジョンソンは辛辣な口調で云つた。「君は外國で結構な人間たちとつき合つたと見えるな、ルツソーとウィルクスとは！」一時に一人を辯護するのが精々だと思つたので、私は私の陽氣な友人の方には觸れずに、ほ／＼とみながらかう答へた。「先生、あなたはルツソーを悪友だとはおつしやらないでせう。あなたはあの人をほんとは悪い人だと思ひなのですか？」ジョンソン、「君が冗談を云ふつもりなら、わしは君を相手にしないよ。君が眞面目なら、わしは彼を最も悪い人間の一人だと思つてゐるのだ。彼が實際さうされた通り、社會から放逐さるべき悪漢だと思つてゐるのだ。三箇國か四箇國が彼を放逐した。彼が

此の國で保護されたのは恥づかしいことだ。」ボズウェル、「私は彼の小説が、ことによると有害かも知れぬといふことは否定しません。しかし、彼の意圖が悪かつたとは思へません。」ジョンソン、「君、それは不可んよ。われ／＼は誰の意圖だつて悪いとは證明することはできないよ。人の頭を射抜いて置いて、狙ひを外すつもりだつたとも云へる。しかし裁判官は之を絞罪に附するだらう。罪を犯して置いて、その意圖が無かつたと云ひ張つても、法廷では容れない。ルツソーは、君、大へん悪い男だ。わしは、この長年の間オールド・ベリー（譯者註、昔のロンドン中央法廷）から送られた如何なる重罪犯人よりも、先づ彼を流刑に處する判決に署名したい。さうだ、わしは彼を植民地で勞役に服さしめたいのだ。」ボズウェル、「先生、あなたは彼を、ヴォルテールと同じ位悪い男だと思はれますか？」ジョンソン、「左様——二人の罪の大小を定めることは容易でないね。」ルツソーの靈活なる著作を多く讀んで興味を感じ、啓發される所さへあり、又その人と親しく交はるの愉快を持ち、彼が一般に大いに尊敬されてゐる大陸から歸つたばかりの私にとつては、この亂暴な云ひ方は甚だ異様に聞えた。今日に到るも私は、ジョンソンがこの人に對して加へた苛酷な非難が妥當であるとは認められない。彼の、文明生活より野蠻生活を良しとする、馬鹿げた説や、その他の奇矯な點は、心情の墮落といふよりは悟性の缺陷を示すものである。多くの識者が、彼の「サヴォイの牧師の信仰告白」（譯者註、エミール）に對して氣の毒な批評を下してゐるに拘らず、私はそれを、困惑すべき懷疑に圍まれつゝも「聖なる神祕」への誠實敬虔な歸依に充ちた人の作として、感服せずにはゐられない。かゝる心の状態は、怒りを以てするより、憐憫を以て

臨むべきである。

彼のお得意の話題である従属制度について、ジョンソンは云つた。「人間は本来平等であるといふのは眞理を去ること甚だ遠いもので、二人の人間が三十分も一しよに居れば、必ず一方は他の者に對して明らかな優越を占めてしまふ。」

私は、苦しんだり困つたりした時には、自分よりもつと悪い境遇にある人々のことを考へて自らを慰めるがよい、といふ賢哲の忠言について論じた。これはすべての人には適用できない、何故ならば自分等より、もつと悪い境遇にある者を有してゐない人々も有るに違ひないから、と私は云つた。ジョンソン、「それは有るに違ひないさ。しかし本人はそれに氣がつかないのだ。どんなに憐むべく輕蔑すべき人間でも、自分よりもつと憐むべく、もつと輕蔑すべき者がゐる、と考へない者はない。」

この時の私のロンドン滞在は大へん短かつたので、私はジョンソン博士と共に在る機會を多く持たなかつた。しかし私は、「多クノ人々ノ風俗ヤ都市」を見たことによつて、彼に對する私の尊敬が毫も減じないのを感じた。却つて他國の多くの高名な人物と比較することが出来るやうになつた結果、彼の非凡な心性に對する私の尊敬は、高められ且つ堅くされた。

彼の擧止に時折あらはれる粗野は、努めて滑らかに人觸り良くする大陸の慣習に馴れた私には、以前より一層目に立つた。そして、彼が相變らず、善良な主義を弛緩させ、又は稀薄ならしめる、あらゆる企てに對し、憤然として辛辣な扱ひをするのをはつきり認めて、その正直な良心的熱情

には敬意を表さざるを得なかつた。

又の晩、ゴールドスミス博士と私は、「マイター」で夜食を共にするやうに説き伏せるつもりで、彼を訪問した。彼は工合が悪くて外出しない決心をしてゐた。ゴールドスミスは云つた。「よろしい、僕等は今夜は『マイター』に行くのを止めるとしよう、親分と一緒に來れないのなら。」すると、ジョンソンは一本のポトワインを命じた。ゴールドスミスと私は、それを飲み、今は水ばかり飲む人となつた、吾等の友は、たゞそばに坐つてゐた。ゴールドスミス、「ジョンソンさん、あなたは近頃劇場に近づきなさんやうですね。あなたは、てんで劇壇に縁が無かつた人のやうに、新しい芝居などに一寸も注意を向けなさん。」ジョンソン、「いや君、人間の趣味は随分變るものだ。少年になると赤ん坊の「ガラ／＼」は詰まらなくなるし、老人は若い者の賣女に用は無くなる。」ゴールドスミス、「それはさうですが、あなたの詩神ポセイドンは賣女ではありませんでした。」ジョンソン、「わしもさうとは思はない。しかし、われ／＼は人生の旅路を進んで行くにつれて、昔喜んだ物の幾つかを棄ててしまふものだ。われ／＼が疲れて來て、もはやそんなに澤山のを携へるのを欲しくなくなるのか、或ひは、他にもつと善いものを見出すのか、どつちだか知らぬが。」ボズウェル、「そんなら何故、何か他の方面で何物かをわれ／＼に興へて下さらないのですか？」ゴールドスミス、「さうだ、われ／＼はあなたに要求する權利が有る。」ジョンソン、「いや君、わしはこれ以上仕事をする義務は無い。誰だつて精根限りやらなければならんと

いふ理由は無い。人間は一生の一部分を自分の思ひ通りにしてよいわけだ。軍人が幾多の戦争で戦つた後には、隠居して安樂と平穩を求めても咎めらるべきでない。大都會で長年開業して来た醫師は、小さい町に隠退して仕事を狭めても誰も文句は云ふまい。ところで、わしが談論によつてなし得る功德と、文筆によつてなし得る功德との比例は、小さい町に隠退した醫者のする診療と大都會に於けるその診療との比例に等しいのだ。」ボズウェル、「しかし、先生が、物を書かないよりは書いた方が愉快だ、とお思ひにならないのは不思議ですね。」デヨンスン、「勝手に不思議がりましたまへ。」

彼は詩を作ることについて語つた。——「むづかしいのは何時うまい詩ができたか知ることだ。詩を作るとき、わしは大抵、心の中でこしらへる。一時に五十行ぐらゐ、部屋をあちこち歩き廻りながら作る。然る後にそれを書きつける、面倒なので半行ぐらゐづつで済ますことも多かつた。一日に百行も書いたことも有つた。『人間の望みの虚しさ』を一日に百行書いたのを覚えてゐる。ねえ、ドクトル、(ゴールドスミスの方を向きながら)、わしもまるで怠けてばかりゐるわけではないよ。先日、わしは一行作つた、しかしそれつきりだつた。」ゴールドスミス、「それを聞かせて下さい。それにわれ／＼が下手な句を續ぎませう。」デヨンスン、「ところがその一行を忘れてしまつた。」

偉大なるサミュエル・デヨンスン博士のうち解けた、諸議に富んだ、かういふ例は、重大な問題に當れば、それに應じて實に博大強力となる心性の、細かい變化を示すものとして、又、彼の

性格と物の考へ方の、詳細な知識を供給するものとして、珍重に値ひすると思ふ。

スコットランドに歸つて暫くしてから、私は彼に手紙を寄せた、「數年の間留守にして故國に始めて歸つて見ると、多くの知人があの世に去つた話を聞かされました。丁度戰場を歩き廻つて其處にも此處にも知つた人が仆れてゐるのを發見するやうな氣がします。」又、心境の動搖を訴へ、善い生活の保證のために誓ひを立てたことを述べた。私は重ねて書を送つたが、彼の物臭を動かすことはできなかつた。スコットランドの慣習にしたがつて、私が辯護士たることを免許されたときに發表した開業論文たる、民法に關する論文を一部彼が受け取つたとき、彼ははじめに私にたよりを寄せた。彼はかう書いて來た——

「拜啓

父君に服従しようといふ貴君の決心には小生は心から贊意を表します。但し、誓ひを立てることによつて貴君の朗らかさを束縛する癖をつけないやうになさい。それは時としては貴君の心に棘を残すことになり、恐らく貴君はそれを引き抜き除き去ることができないかも知れません。この警告を服膺なさい、大へん重要なことですから。

法律の研究は正に貴君が云はるゝ通り、廣大であり、深遠であります。それを専門とする人々のうちに貴君の名を加へたことは、小生が貴君の幸福を祈つた時に常に希望したことを貴君が實行されたわけです。小生は貴君がそれを力強く且つ撓みなく追求しつゞけんことを希望します。

少くとも貴君は一つの少々ならざる利益を享けます、——即ち、空虚、無爲、不決斷、なる心に常に跳梁するところの、かの厄介にして執拗なる不満足を免るゝのであります。

貴君は貴君の勤勉と忍耐が、父君を喜ばすであらうといふ點からだけでも、大いにさうする必要があると考ふべきであります。われ／＼はすべて、何人かを喜ばさんとする希望の下に生きてゐます。而して誰かを喜ばすといふ喜びは、われ／＼の努力が義務のために傾注されるときに、最大であるべきであり、又、結局は常に最大であります。

人生は長くありません。それ故、そのあまりに多くの部分を、如何にそれを費すべきかと、とりとめなく考へることに過こしてはなりません。さういふ思考は、慎重にそれを始め、綿密にそれを繼續した人々でも、長い間思案を重ねた結果偶然によつてそれを決定しなくてはならぬのです。精密な理性に基づいて、或る未來の生活の方式を他のものより擇ぶといふことは、創造主が吾等に與へたまはぬ能力を要するのであります。

それ故、貴君が選んだ職業が、豫想せざりし不便を伴ふ場合には、如何なる職業にもそれが無いわけでないといふこと、又空虚といふ絶えざる焦躁と、怠惰といふ物足りぬ方便に較べれば、仕事に伴ふすべての煩雜と面倒は、安樂であり、贅澤である、と考へて自ら慰めなさい。

「これ等はわれ／＼の聲もて汝に忠告し得ることなり」

さらば、往け。(譯者註、イニニイッド、第三卷第四百六十一行)

貴君の『コルシカの歴史』について云へば、貴君は他人の有せざる、又は他人の有し得ざる材

料をもつてゐません。貴君の想像力を燃えさせたしたのはどういふ風の吹き廻しでせうか。或る一箇の觀念によつて不當に、病的に取り憑かれた頭に對しては、『戀人の身投げする崖』のやうな、何等かの治療法があればよいと思つてゐます。貴君自身の事に専心しなさい、そしてコルシカ人をして彼等の事をなすに任せなさい。敬具

ロンドンにて、千七百六十六年八月二十一日

サム・ジョンソン

ジョンソンの日記によると、彼はこの年、夏至の前からミケル祭(譯者註、九月二十九日)の後までもスレール氏邸に起居し、それから後オックスフォードで一箇月を過こしたらしい。

千七百六十七年二月にはジョンソンの生涯中特筆大書すべき事件の一つが起つた。それは彼の尊王心を悦ばしたもので、彼は友人に求められてその一部始終を語ることが好んだ。それは「女王の宮殿」の圖書室で、國王陛下と私的會談をなすといふ光榮をもつたことである。彼は此處のすばらしい部屋々と立派な書物の蒐集を以前から屢々訪れて居り、かねて、それについて、國王がそれに費されただけの時日では、何人も企及できさうもないほど書物の數も多いし、珍本にも富んでゐる、と語つてゐた。圖書掛りのバーナード氏は、彼が此處で讀書の趣味に涵るときには、その安易便利をはかるためにあらゆる便宜を與へようと骨折つた。そこで彼は閑なときは、此所で大へん氣持のよい氣散じをしたのである。

陛下は彼が時折此所を訪れる話をお聞きごみになり、次にデヨンスン博士がこの圖書室に來たときには知らせて欲しい、といふ思召しをお洩らしになつた。そこで、デヨンスンが次に來たとき、彼が一冊の書物に本式にとりかかり、火のそばに坐つて餘念の無くなつた様子を見るや否や、バーナード氏は王が居られる部屋にこつそり参り、かねての御命令に従つて、デヨンスン博士が圖書室に参つてゐる由を言上した。陛下は、今は閑だから彼の所に往つて見たいと仰せられた。そこでバーナード氏は、王の卓子の上に立ててあつた蠟燭を一本取つて、陛下の御足下を照らして一と並びの部屋を通り過ぎ、圖書室の脇入口まで來た。陛下はその鍵を持つて居られた。中に這入ると、バーナード氏は急いでデヨンスン博士の所まで歩み寄り、未だ一所懸命讀み耽つてゐる彼に耳打ちした。「先生、國王陛下がおいでです。」デヨンスンは驚いて立ち上り、不動の姿勢をとつた。陛下は近寄られ、たゞちに碎けた慇懃さを示された。

陛下は先づ、彼が時折圖書室に來るのを聞いてゐる話から始められ、次いで、博士は最近オックスフォードに往かれたさうだが、あそこに往くのは楽しみではないか、とお尋ねになつた。デヨンスンは之に對して、實際時々オックスフォードに往くのを好むが、そこから歸つて來るのも同様に愉快である旨、お答へした。王は次に、オックスフォードの連中は何をしてゐるか、とお尋ねになつた。デヨンスンは答へて、彼等の勉強ぶりはあまり賞められないが、改善された點もあること——即ち、彼等はその印刷所をより良く整備し、當時ポリビアス(譯者註、ギリシアの歴史家(紀元前三〇四年—同二五五年))を印刷してゐた旨、申し上げた。彼は次に、オックスフォードとケームブリッジとどつちに一層良い圖書

館があるか、といふ御質問を受けた。彼はポドレーアン圖書館は、ケームブリッジが有してゐる孰れよりも大きいと信ずる旨申上げ、同時にかう附け加へた。「ケームブリッジより私どもの方が一層多くの書物をもつてゐるかどうかは別として、あそこの人々と同じくらゐ私どもも書物を利用したいものだと思つて存じます。」オール・ソールズ(譯者註、ケームブリッジの圖書館)とクライスト・チャーチ(譯者註、ケームブリッジの圖書館)のそれとどつちが大きいかと聞かれて、「ポドドレーアンを除けばオール・ソールズの圖書館は私どもの方では一ばん大きいと存じます。」とお答へした。王は云はれた。「左様、あれは公共圖書館だね。」王は彼に、現在何か書いて居るか、と御下問になつた。彼は、今は書いて居りませぬ、何となれば、もう自分の知つてゐることは大概世間に語りつくしてしまひ、今はもつと知識を獲るために讀書せねばならぬからであります、とお答へした。王は、彼が獨創的作家として自分自身の蘊蓄にたよるやう、又、彼の勞作をつゞけるやう、勸告する思召しらしく、「あなたは他人からあまり借り物されるとは思へない。」と仰せられた。デヨンスンは、私はもつと作家としての自分の役割りを済ませたと存じます、と云つた。王は云はれた。「あなたがあんなに良く書かれなかつたら、わたしもさう思ふのだが。」——デヨンスンはこれに就て私にかう云つた。「何人もこれ以上立派なお世辭を云ふことはできない。それはいかにも王者にふさはしいものであつた。それは決定的であつた。」サー・デヨシユア・レノルヅの宅で、別の友人から、この大なるお世辭に對して何か返辭を申し上げたか、と尋ねられたとき、彼は答へた。「いや、王がさう云はれたからには、さうあるべきだ。君主と辭令のやりとりをするのは、わしとしてすべきことではない。」

恐らく生涯を宮廷生活に費した人でも、この折にデヨンスンがした以上に、眞の禮儀の見事な理解を示すことはできなかつたらう。

陛下が、あなたは随分讀書されたらうと云はれると、デヨンスンは、自分は讀書より一層多く思索したといふこと、若い時分には随分讀書したが、不健康に陥つたので、他の人ほど多く讀むことができなかった、例へばウォーバートン博士などに較べては多く讀んだと云へぬ、とお答へした。すると王は、ウォーバートン博士は該博な知識の持主で、どんな問題を持つていつても、それを論ずるだけの資格を具へてゐないことはなく、その學問は往くとして可ならざるはない點で、ギャリックの演技に似てゐる、と聞いてゐる、と仰せられた。陛下は次に、ウォーバートンとロースの間の論争（それを陛下はお讀みになつたものと見える）に就てお語りあそばし、デヨンスンに、どう考へるかとお問はれた。デヨンスンはお答へした、「ウォーバートンは最も該博で最も學究的な學問をもつて居ります。ロースの方は一層正確な學者でございませぬ。悪口をたたくのはどつちがうまいか存じませぬ。」王は御自身も同じ意見だと仰せられ、「デヨンスン博士、それではあなたはこの場合、あまり大した論議は無かつたと思はれるのですな。」と附け加へられた。デヨンスンは、無かつたと存じます、とお答へした。王は云はれた。「左様、左様。悪口の云ひ合ひとなれば、論議は大概お仕舞ひとなる。」

陛下は次に、當時出版されたばかりのリットルトン卿の『歴史』をどう思ふかをお尋ねになつた。デヨンスンは、その文體は中々よろしいと思ふが、ヘンリー二世のことを少し悪く云ひ過ぎ

ると思ふ旨、お答へした。「でも、歴史家がかういふ場合、大抵極言することを憚らない。」と王は云はれた。「左様です、國王等に對しては。」とデヨンスンは答へた。しかし誤解を恐れて彼は釋明にかゝつた、そして直ぐにかう追加した。「國王等を、實際あつたよりも悪く云ふ者に對しては、辯護の餘地を見出しませぬ。しかし、別に悪意はなく、彼等が實際あつたより善く云ふ者があるが、その心持は理解に難くありません。何となれば王は偉大な恩を施す力を持つてゐるから、それを蒙つてゐる人間は、感恩の情から誇張して稱讚することが屢々あります。これは善い動機から發したことですから、誤謬が大目に見られる限りに於いては、確かに大目に見られ得るものです。」

次に王は、ヒル博士をどう思ふかと御下問になつた。デヨンスンは、彼は器用な人だが、正確を缺いてゐる、とお答へし、直ちにその一例として、この著作家が、三四箇の顯微鏡を同時に使用することによつて、一箇の顯微鏡によるよりも物體を遙かに擴大して見た、と稱したことを擧げた。「所が、顯微鏡のことを心得てゐる者は誰でも、それを多く重ねれば重ねるほど、それを通して見る物體は、より小さく見えることを知つて居ります。」とデヨンスンは附言した。王は云はれた、「ほほう、それでは嘘であるばかりでなく、まづい嘘ですね。何故ならば、さういふ譯なら、顯微鏡を覗くことのできる者は誰でも、彼の嘘を發見することができませうからね。」

その場の話をしながらデヨンスンは、友人にかう云つた。「わしはその時、この人々についての、陛下の御評價を低めつゝあるのに氣がついた。そこで何かもつと有利なことを申し上げべき

時だと考へた。」そこで彼は、それにも拘らず、ヒル博士は研究心の甚だ旺盛な観察者であるといふこと、そして若し彼が、自分の知つてゐる限りのみを世間に語ることに満足したなら、随分えらい人物となり、自己の名聲を高めるために、あんな詰らぬ手段を用ひる要は無かつたであらうに、と申し添えたのであつた。

王は次いで、文學雜誌——特に『ジュルナル・デ・サヴァン』の話をもち出され、その出来栄へはどうか、とジョンソンに御下問になつた。ジョンソンは、それは以前は大へん良く出来てゐました、と申し上げ、それを創め又數年間つゞけた人々について、若干の説明を申し上げ、且つかういふ刊行物の性質と用途を絮説した。王は、それは現在も良く出来てゐるかとお尋ねになつた。ジョンソンは、どうもさうは考へられませぬ、と申し上げた。王は更に我が國で、『マンズリー・レヴュー』と『クリティカル・レヴュー』の他に何か文學雜誌が有るかと問はれ、他には無い由の返答に、それでは右のうち、どつちが良いかとお尋ねになつた。ジョンソンは、『マンズリー・レヴュー』は頗る用意周到に編輯されてゐるが、『クリティカル』は主義方針が優つてゐるとお答へし、尙『マンズリー・レヴュー』の寄稿家等は英國教會の敵である旨付け加へた。王はそれは遺憾である、と云はれた。

會話は次に『フィロソフィカル・トランザクション』のことに轉じたが、ジョンソンは、この雜誌は昔よりは材料の按排法が巧みになつたと申し上げた。王は、「左様、それはジョンソン博士のお蔭です。」と仰せられた。ジョンソン自身は忘れてゐたが、陛下はその間の事情を聞いて

記憶して居られたのである。

陛下は、我が國の文學的傳記を善く書いたものが欲しいと仰せになり、ジョンソン博士に、それをやつて見てはどうかと提言された。ジョンソンは、陛下の御希望に添ひ奉る用意がある旨申し上げた。

この接見の始めから終りまで、ジョンソンは、深い敬意を以つて陛下にお話し申し上げたが、しかし、彼は確乎とした男らしい態度と朗々たる音吐を以てして、朝の賜謁の際、接見の間で、普通用ひられるヒソ／＼聲は少しも用ひなかつた。陛下がお引き取りになつた後、ジョンソンは陛下の御談話と優渥な御とりなしにいたく感激した態であつた。彼はバーナード氏に云つた、「王のことを他人は何んとても云ふがよい、しかし、あの方はわしが曾つてお會ひしたうちで最も御立派な紳士であらせられる。」彼は又、後日ラングトン氏に語つた。「陛下の御態度は、ルイ十四世とかチャールズ二世とかは、かうもあつたらうと思はれるほどの立派な紳士の態度であらせられた。」

サー・ジョシュア・レノルズ邸では、この記憶すべき會談についての彼の話を聞かうと一團の友人が彼を取り巻いたが、中でもジョーゼフ・ウォートン博士は、もち前の明けつ放しの快活な流儀で詳細を聞かうと頻りにせがんだ。「さあ、先生、これは面白い事柄です、是非われ／＼に拜聴させて戴きたい。」ジョンソンは大上機嫌で承知した。

彼は一同に語つた。「陛下はわしがしやべるのを欲せられてゐるやうに拜された。だから、わ

しは努めておしやべりをした。君主によつて話しかけられるのは、ためになると思ふ。第一、激したりすることはできないし——」此所で誰かの質問が話の腰を折つたのは残念であつた。それが無かつたら、彼は、心の諸能力が、刺戟されて激しく活動させられると同時に敬畏の念によつて抑制される、といふ状態になることから生ずる多くの有利な事情を指摘し、例證したにちがひないから。

ジョンソン博士がサー・ジョシュア・レノルツ家に集つた一團の人々に、國王と彼の間に起つた一部始終を語つてゐる間中、ゴールドスミス博士は少し離れたソファアにじつと坐つて、一座の人々の熱心な好奇心には吾不關焉といふ態度を装ふてゐた。彼は自分の憂鬱と無關心らしい態度の理由として、ジョンソンが、彼の書いた脚本に序詞プロローグを書いてくれるものと思つてゐたのに、どうもそれを思ひ止まつたらしいからだと言つた。しかし實の所はどうやら、ジョンソン博士が今回になつた特別の光榮に對して、口惜しさと羨ましさのため悶々としてゐるらしかつた。しかし到頭、彼の持前たる率直と單純がもり返して來た。彼はソファアから飛び立ち、ジョンソンに進み寄り、今まで聞き耳たててゐた話の情景の中に自分を當てはめて、わなゝきながら叫んだ、「全くあなたは、僕がしたであらうよりは立派にこの會談をおさばきになつた。僕だつたら始めから終りまで、お辭儀と吃りのしつゞけだつたでせう。」

千七百六十八年、年齡五十九歳、——彼の精神生活の記録から判斷すると、千七百六十八年には彼は大なる動搖・煩悶に悩んでゐたらしい。この年には、友人ゴールドスミスの喜劇『お人好

し』への序詞プロローグ以外には、彼の筆になるものは何物も發表されなかつた。この序詞の最初の數行は、彼の心の暗澹たる憂愁を強く反映してゐる。それは、すべて同じ心の疾ひになやむ人の場合と同様に彼の場合に於いても、自己の感情を他人にまで推し及ぼしてゐる。ペンスレイ氏(譯者註、當時の名)が重々しくかう述べるとき、それが喜劇の前觸れであると誰が想像できよう？

「人の世の重荷になやみ、つかれし心は
おしなべて人間の勞苦を眺めわたす」

が、この暗い背景はゴールドスミスのユーモアを一層輝かす役にたつかも知れない。この年の春、私は自ら著した、『コルシカ島記、附、同島巡遊日誌』を出版した後ロンドンに歸つた。ジョンソン博士に會つてこの著書に對する意見を聴きたいと熱望しながら。ところが彼は、當時ヴァイナー講座擔當の教授となつて、オックスフォードのニュー・イン・ホールに在つた友人チェムバーズ氏の許に往つてゐることが判つた。……私は彼と一しよになりたくて堪らなくなり、オックスフォードまで押しかけた。……このオックスフォード訪問の際に私が書きとめた彼の會話の斷片を、時と所の説明を添えて敘述しないで、一括して掲げることとしよう。

私は彼に道學者の立場としては、辯護士業といふものは、ある程度まで純眞な正直の感情を傷けるものと考へないかと尋ねた。ジョンソン、「いや君、正當にやりさへすればそんなことは無い。但し君の意見を偽つて依頼人を欺いてはいけない。裁判官に嘘を言つてはいけない。」ボズウェル、「しかし、自分で悪いと知つてゐる事件を支持するのはどういふものでせうか？」ジョンソン

ン、「悪いか善いかは裁判官が判決するまではわからないわけだ。前に云つた通り君は事實をはつきり述べるのが君の役目なのだ。だから、君がある事件を悪いと考へる——君の言葉に従へば、悪いと知つてゐる——とは、推定によるので、君の論理が薄弱で、決定的でない」と君が考へるからであらう。しかしそれだけで全部ではないのだ。君が納得できない論理でも、君が説き付ける相手の裁判官を、納得させるかも知れないのだ。裁判官が納得すれば、その時は君、君が間違つてゐるので彼は正しいのだ。裁くのは彼の役だ。君は、その事件が悪いと思ふ自分の意見に自信を持つべきでない、たゞ依頼人のためにできるだけのこと云つてやればよいのだ。そして裁判官の意見を俟てばよいのだ。」ボズウェル、「しかし、熱心が無いのに熱心があるやうなふりをしたり、實際はそれと違つた意見なのに、はつきりとその意見を持つてゐるやうに見せかけたりする——さういふ欺瞞は自分の正直を傷けないでせうか？ 辯護士は日常の生活に於いても、友人との交際に於いても、同じやうな假面をかぶるといふ危険が幾分ありはしないでせうか？」「デョンスン、「いや、さうでない。すべての人は、君が依頼人のために熱心を見せるために支拂はれてゐるのを知つてゐる。だからそれは本来の欺瞞ではない。君が法廷を出る瞬間には君はいつもの通りの振舞に歸る。でんぐり返しをうつことで金を得てゐる男が、普通に歩くときにはでんぐり返しをうたぬと同様、人は法廷の駆け引きを日常社會の交渉にもち込みはしないさ。」

近代の戯曲の話が出たとき、私は『偽りの上品』(譯者註、ケリーの作、千七百六十八年に發表さる)は性格を缺いてゐると云つた。彼はゴールドスミス(譯者註、ケリーの作、千七百六十八年に發表さる)の『お人好し』を褒めた。それは『怒れる良人』(譯者註、ヴァンブラ及びシバの作、千七百二十八年に發表さる)

が出て以來最善の喜劇であると云ひ、近年はクローカー(譯者註、お人好しの中の人物の名)の如き性格が舞臺で示されたことが無かつたと云つた。私は、それはデョンスンの『ラムブラー』に出てくるサスピリウスである、と云つた。彼は、ゴールドスミスも、そこから借り來つたことを認めた、と云ひ、尙かう云つた。「君、自然の性格と風俗の間には天と地の相違がある。そしてそこにはフィールディングの性格とリッチャードスンの性格との差がある。風俗の性格は中々面白い。しかし、それは自然の性格よりも、より皮相的な觀察者によつて理解され得る。自然の性格に於いては、人は人間の心の隠れた箇所まで潜りこまねばならない。」

私にはどうも、彼はリッチャードスンの作物をあまりに高く評價し、フィールディングに對しては理不盡な偏見を抱いてゐたやうに思はれる。この兩人を比較するのに、彼はかういふ表現を用ひた。「二人の間には、時計がどういふ仕掛けになつてゐるか知つてゐる人と、時計の字面を見て時間を云ふことのできる人とぐらゐの、大きな差異がある。」これは彼の、自然の性格描寫と單なる風俗の性格描寫との區別を手短かに譬喩的に述べたものである。しかし私としては、フィールディングの手際良き懐中時計は、リッチャードスンの大時計と同じぐらゐ良く作られて居り、その字面は一層輝やかしいと考へざるを得ない。フィールディングの性格は、その論述に於いてあまり大きくひろがりはしないが、リッチャードスンのそれと等しいぐらゐ正確な人間性の描寫であり、私は敢へて云ふが、一層心を打つ特色を具へ、一層微妙な筆觸を有してゐる。デョンスンはよく「フィールディングの主人公等の美德は、眞に善良な人にとつては悪徳である。」とい

ふリツチャードスンの言葉を、我が意を得たりと引用してゐるが、私はフィールディングの書いたものの道徳的傾向は、無理のある、減多に有り得ないやうな美德を鼓舞はしないが、つねに名譽と正直を助長し、惠み深い、寛大な愛情をはぐくむ、と敢へて附言したい。フィールディングの描く程度に善い人間は、愛すべき社會の一員であり、確實な指導者を得たならば、より高い程度に倫理的完成に導かれ得るであらう。

この頃、スコットランドに對する彼の偏見は甚だ強かつたやうである。私がわがスコットランドの文學方面に於ける進歩を語ると彼は云つた。「君、君がたはわれ／＼から少しばかり學び得た。そこで君がたは大へん偉大な人間であるやうな氣でゐる。ヴォルテールがその前に歴史を書かなかつたらヒュームは決してそれを書かなかつたらう。彼はヴォルテールの模倣者に過ぎない。」ボズウェル、「しかし先生、われ／＼はケームズ卿を有して居ります。」ジョンソン、「なる程、ケームズ卿をもつてゐたか。せいぜい大事にとつて置きたまへ、アツハツハツハ！ われわれは羨ましくないよ。時に君、ロバートソン博士に會ふことがあるかい？」ボズウェル、「ええ、ございます。」ジョンソン、「あいつはわしの噂をすることがあるかね？」ボズウェル、「ええ、あります、そして先生が大好きです。」彼をうまく捉へたと思ひ、且つ私の國の文學的名譽を揚げようと意氣こんで、私はロバートソン博士の『スコットランドの歴史』の價值について彼の意見を強つて聞かうとした。然るに驚いたことに、彼はから體をかはした。「君、わしはロバート

スンを愛する、だからこそ彼の著作のことは語りたくないね。」

彼とロバートソン博士の名譽のために云つて置くが、彼はこんな警句を吐きはしたものの彼の鑑賞眼を以てして、あの立派な著作の價值を十分認識しないわけは無かつたのである。

英國教會の牧師デイーン氏が書いた、聖書の所々の解釋に基いて動物の未來の生命を論じた論文が話題に上つたところ、風變りな思索を好むらしい一紳士が頻りにその所説を主張した。正統派の確かな證據によつて承認されたもの以外には、未來の状態について何事も聞くことを好まなかつたジョンソンは、この話を止めさせようとした。ところがこの紳士は相變らず話をつゞけるので、業を煮やした彼は、それに痛撃を加ふべき機會をうかがつてゐた。この氣の毒な思索家が、生眞面目な瞑想的な沈んだ顔をして、「ですが、先生、實際、非常に伶俐な犬を見ますと、それをどう考へたらよいものか解りません。」と彼に話しかけたとき、ジョンソンは、自分の思ひつきに眼までかゞやかせ、愉快でたまらぬ風でからだを揺すりながら、ぐいと振り向いて答へた。「全く。それから、非常に馬鹿な人を見ると彼をどう考へたらよいものか解らないね。」さう云つて立ち上り、爐の方へ大勝で歩み寄り、暫く立つたまま、笑ひに笑つて嬉しがつてゐた。

私はイタリーにゐたとき、周圍に炭を眞赤におこした圓の中に蠟を置く實驗を、何度も見た話しを彼にした。蠟は熱さに堪へかねてぐる／＼走り廻る、そして逃れる路が無いと見ると、中央に引きあげ、眞のストイック派の哲學者にも愧ぢぬやり方で自らの針を頭に打ちこみ、かくして一擧に苦しみから自由になる、と話した。「かくして惱苦を斷ぜん。」これは爬蟲類が自ら求めて

自殺を遂げることを示すもので奇異な事實である、と私は云つた。デヨンスンはこの事實を認めようとしなかつた。彼は、モーベルトウイ(譯者註、フランスの科擧者 一六九八年—一七五九年)の見解によると、——蠟は自殺するのではなく、熱のために死ぬのである、それは一ばん熱くない所を求めて中心に赴くのである、それが頭の上に尾を巻き上げるのは痙攣に過ぎないので、自ら刺すのではない、——とある、と云つた。彼は、もし偉大なる解剖學者モルガーニ(譯者註、イタリーの人物 一六八二年—一七七二年)がこの實驗に供せられた蠟を解剖して見たのち、その針が腦天を貫いてゐる、と證明したならば納得しよう、と云つた。彼は博物物について談ずるのを好んだやうである。

彼は家庭の平和を破壊する姦通の罪の極めて忌まはしいものであることを論じた。曰く、「血統の紊亂がこの罪の本質である。それ故結婚の誓ひを破る女性は、同じことをする男性よりも遙かに罪が深い。なるほど、さういふ男も神の御前では罪が有る。しかし彼が妻を侮辱しない限りは、非常に重大な害悪をなすわけではない。例へば、單なる欲情のつゝのるまゝに妻の侍女のところに密かに忍びこむやうなことは、妻たるもの之を大袈裟に怒るべきではない。わしなら、かういふ理由で夫の許から逃げて来た娘を家に迎へ入れない。妻は夫を喜ばすことにもつと注意をそそいで、夫を取り戻すやう努力すべきである。妻が夫を喜ばすことを懈らなかつたら、百に一つも、夫は彼女をさし置いて娼婦に奔ることはないであらう。」

あらゆる場合に發揮される彼の精妙な分別力と確乎たる判断と人間性の知識が、此所にも示さ

れてゐる。わが國に於いて理解されたる道徳的宗教的義務に鑑みることをつとめる彼は、理性と良識からして、之を逸脱した際に、女性の方が男性よりもその罪の程度が一層重いことを明瞭に示した。と同時に、「夫を引きつける方法」について大へん有益な教訓を垂れた。

私は、たつた一回貞操を傷つけることが、若い婦人をかくも絶對的に破滅させるとは酷に過ぎないか、と問ふた。デヨンスン、「さうではない。これは彼女が教へこまれた大いなる原則だ。この原則を抛つたときには、すべて、貞操に含められるところのあらゆる女性の名譽と美徳の理想を抛つたのだから。」

ある紳士が彼に、自分は一人の女性を大へん敬愛して居り之と結婚したいと思ふが、その婦人の才能の卓拔さを恐れてゐると語つた。彼は曰く、「君、恐れることはない、結婚したまへ。一年とたたないうちに、その理性がずつと薄弱であり、その才智があんまり輝やかしくないのを發見するよ。」しかし、デヨンスン博士の『ウォラー傳』中の見事な文章の一つを讀むと、この紳士の心配がもつともであるとも考へられる。——「彼は疑ひもなく、それと結婚するを恐れたらん如き多くの人々を褒めた。そして多分、それを褒めるのを愧ぢたらん如き者と結婚した。家庭の幸福には、詩がそれに彩色を施し得ざる如き性質が多く貢獻するものである。而して、それを賞めそやす者が、善しと認め得ざる多くの氣取りや警句が、人の想像を喜ばすことが有る。」

彼はパレットイ氏を褒めた。「彼のイタリーの話は、非常に面白い書物だ。それから君、座談に於てパレットイほど高い見識を持してゐる男を見たことがない。彼の心は強い力を具へてゐる。」

なるほど、彼は澤山の鉤は持つてゐない、しかし、持つてゐるかぎりの鉤を使つてあの男はしつかり引つ掛ける。」

この時、私は彼の時計の文字盤に *Nuŕ yap epXerati* といふ、新約聖書からとつた短いギリシヤ語が刻んであるのを見た。これは「夜來らん、その時誰も行をなすこと能はず」といふ、われわれが永遠への準備のために許された時間を有益に費すやう戒めた、吾等の救ひ主のおごそかな訓言の冒頭である。彼は暫く後に、この文字盤をしまひこんでしまつた。私はその理由を訊くと彼は云つた。「あれは私室に置いとく置時計に用ふるのなら差支へない。しかし、しよつ中持ち廻つて、他人にもちよい／＼見られる懐中時計につけるのは、これ見よがしの譏りを受けよう。」右のやうに録された文字盤は今ステイヴンス氏の所有に歸してゐる。

彼は相當長くオックスフォードに滞在した。私はロンドンに歸らなくてはならなかつた。

彼は五月になつてロンドンに歸ると、ハーフ・ムーン街の私の下宿を驚かし、私の陳辯(譯者註、
手紙の一部分を譯手に發表したことに對して)を聞いてすつかり満足し、大へん懇篤にそして上機嫌になつた。彼は自分の手紙の一部が發表されたことに異議を唱へたのであるから、私は此の際、彼の死後に彼の手紙を發表してはいけなかつたか、はつきり訊いて置くべきだと考へた。答へはかうであつた。「いや君、わしが死んでしまつてからは、好きなやうにしてくれ。」

それから間もなく、彼はストランドの「クラウン・アンド・アンカー」料理店で、彼に會はせるために私が集めた人々と晚餐を共にした。集まつた人々は、現在ドローモアの監督であるパーシ博士、現在ソールズベリーの監督であるダグラス博士、ラングトン氏、歴史家のロバートス博士、ヒュー・ブレア博士、及びトマス・デーヴィス氏で、デーヴィス氏はこれ等の卓れたスコットランドの學者に頻りに紹介を望んでゐたのである。然るに彼は此の折、それ等の人々の話を聴く機會を甚だ僅かしか得なかつた。何となれば、デボンソンも後日非難したことがあるが、彼等はあまりに用心して減多に口を開かず、たまに開けばデボンソンといふ巨人ゴライアスの利刃に身を曝らす危険の無さうな事のみを語るに過ぎなかつた。彼等がデボンソンの前で自分の名譽を落すまいと心配したことは、かくの如くであつた。デボンソンはこの晩、心の活力が横溢して論辯大いに努め、談論風發の概があつた。しかし残念ながら、私はこの時の話の一小部分しか保存して置かなかつた。

彼はチェルシー・カレッジの老博士マウンズイを、「不敬の言を吐き淫猥な話をする男」だと云つて猛烈に攻撃した。パーシ博士は云つた。「私は屢、彼と一しよになつたことがあるが、彼か不敬の言を吐いたり淫猥な話をするのを聞いたことはありません。」パーシ博士の隣りに坐つてゐたデーヴィス氏は、その後でパーシ博士と二人だけで暫く話し合つた結果聞き知つた意見を、デボンソン博士への忠義立てをしようとして、食卓の末席から大きな聲で披露した。「おお先

生、マウンズイが不敬の言を吐いたり淫猥な話をしたのを、パースイ博士が聞いたことがないのも至極もつともな理由を私は発見しました。パースイ博士はマウンズイに、ノーサンブランド公爵家の食卓で會つただけださうです。」ジョンソン博士は大聲でパースイ博士に云つた。「では、あんたは、ノーサンブランド公爵の食卓でさうしなかつたといふ理由で、不敬な言を吐いたり淫猥な話をするといふ非難から、あの男を庇はうと云ふのかね。その流儀でいけば、あの男がオールド・ペーリーの中央法廷に立たされたのは見たことがあるが、不敬の言を吐いたり淫猥な話をしたことが無い、とか、タイバーンの處刑場で引き廻しの車に乗せられてゐるのは見たことがあるが、不敬の言を吐いたり淫猥な話をしたことが無い、とか云へる筈だ。そんなことで、わしの云つたことを反駁しようと思ふのかね？」ジョンソン博士にやり込められてパースイ博士は不機嫌になつたらしく、間もなく席を外した。ジョンソンはそれを、その時は少しも氣づかなかつた。スウィフトの話が出たが、ジョンソンは例の通り、彼を作家としては一向尊敬しない態度で扱つた。われ／＼の中二三の者は種々な論據から、この聖パトリックの首牧師を支持しようとした。特に一人は彼の『同盟者の行爲』を稱揚した。ジョンソン、「彼の『同盟者の行爲』は甚だ才能に乏しい文である。」ダグラス博士曰く、「しかし、そこには力強い事實があるといふことは、確かに認めねばなりませんまい。」ジョンソン、「成る程。が、それは文章の長所と何の關係があるか？ オールド・ペーリーの中央法廷の審理事件一覽にも力強い事實がある。家宅侵入は力強い事實だ、強盗は力強い事實だ、殺人に至つては甚だ力強い事實である、しかし之等の力強い事實を記録し

た者は賞讃されなければならないのかね？ 否、否。スウィフトはなるほど、云ふべきことをはつきり云つた。が、それだけの事だ。彼は十算へる必要があつて、それを間違へず算へた、といふだけだ。」それから彼は、先刻デーヴィス氏が告げ口をしたために、友人パースイ博士に多少荒々しい口を利いたのを思ひ出し（多分、最初の爆發がすんだあとで幾分良心の呵責を感じたらしく）、この機にデーヴィス氏を問ませて置かうとした。そこで前以つて笑つてから、かう附け加へた。「さうだ、トム・デーヴィスも『同盟者の行爲』を書いたかも知れぬ。」氣の毒にもトムは、その人々から偉く思はれたいと思つてゐた、スコットランドの博士連の面前で、不意に赤恥をかかされ、いたく懊惱した。彼の受けた罰はその場だけではすぎなかつた。それ以來「頭から爪先までの政略家」である彼が、尊大な素振りをするごとに、私は彼に「『同盟者の行爲』の著者」と呼びかけてやつた。

翌朝ジョンソン博士を訪れると、彼は前夜の自分が示した談論の勇猛さに大いに満足の状態であつた。「昨夜は愉快に語つたね、」と彼は云つた。ボズウェル、「さうですね、先生。——先生は幾人か突きまくつて怪我人をこしらへましたよ。」

故エグリントン伯アレクサンダーは、酒よりは賢才を、追従者より天才を愛する人物であつたが、ジョンソンに對し並々ならぬ尊敬をもつてゐた。が、彼自身すぐれて舉措閑雅であつたので、ジョンソンの態度に時折あらはれる粗野をあまりに鋭敏に感ずるらしかつた。恰もこの頃のこと、ある晩、卿がロバートソン博士その他、幾人か文學に秀でた人々と、私の宿で晚餐を共に

された時、卿はジョンソンがもつと洗煉された教育を受けなかつたこと、もつと上流の社會に生活しなかつたことを遺憾とされた。バレット氏は云つた。「いや閣下、どんな手段をつくしても、あれは飽くまで『熊』だつたでせう。」伯爵はほゝゑみながら云つた。「なる程。しかしダンス位する熊にはなつたらうね。」

ジョンソンに『熊』といふ仇名をあてはめて世間に流布した、彼に不利な評判を一掃するため、私は讀者諸君に、ジョンソンを善く知つてゐた私の友人ゴールドスミスの正當な名言を是非とも聴いて頂きたい。曰く、「實際ジョンソンには舉動に粗野なところがある。しかし彼ほど優しい心を持つてゐる人は此の世に無い。彼の熊らしい所は皮だけだ。」

千七百六十九年、年齢六十歳、

秋になつてから、私はロンドンに出て、彼に二三箇月後に私が結婚するはずであることを告げた上、これからは恐らくスコットランドに多く住まねばならぬことになり、獨身だつた時のやうに繁々と彼に會へなくなるだらうと思はれる新生活に入るに先だつて、できるだけ多く彼と對話したいと欲した。ところが彼はスレール氏夫妻とブライトヘルムストーンに行つてゐることが判つた。

ブライトヘルムストーンからジョンソン博士は次の手紙をくれた。かういふ手紙を發表するのは遠慮すべきだと考へる者は、私が常々公言してゐる熱情に共鳴できぬ人々にちがひない。

「私の『コルシカ島記』の序文中と私はかういふことを述べて置いた。『……私は文學的名聲に對して熱烈な野心を有

してゐる。……かゝる著作家（譯者註、名譽を書いた人は、憂鬱不平の時に於いて、自分の書いたものが、かういふ時に於いてさへも多くの人々に快樂を興へてゐる、と考へる慰めを感じ得る。かゝる著作家は、死後も記憶されるといふ希望——それは各時代の氣高い心の持主にとつて大きな目的であつた——を抱き得る。』

「ジェームス・ボズウェル様

拜啓 貴君は何故小生を不親切なりと咎めらるゝのですか？ 小生は貴君のためになること、貴君を喜ばすことは、懈らずしてゐます。貴君の『コルシカ島記』について小生の意見を開陳しなかつたことを除いては、小生の意見は——小生の判断を貴君が尊重さるゝならば——貴君を喜ばし得たでありませう。しかし稱讚によつて如何に多くの虚榮心が刺戟されるかを考へて見れば、貴君のためになり得たかどうかは疑はしいと思ひます。貴君の『歴史』は、他の歴史と格別違つた所もありません。しかし貴君の『日記』の方は極めて珍らしく且つ愉快であります。『歴史』と『日記』の間には、他から借り來つた觀念と、内から生れ出た觀念の間に常に見出だされる、あの相違があります。貴君の『歴史』は書物から寫しとられたものです。貴君の『日記』は貴君自身の體験と觀察から生じたものです。貴君は自らに強く作用したる寫象を表現し、それを讀者の上に力強く印銘しました。これほど好奇心を呼び起し、これほどそれを満足させた記述が他に有るかどっか。

小生は貴君が結婚されんとしつゝあるのを喜びます。小生は、かほど重要ならざる事柄についても貴君に幸あれと願ひます故に、貴君の生涯のこの重大時機に際して、それに比例する熱心さ

を以て貴君に幸あれと願ふものであります。貴君の幸福に貢献し得ることならば、小生は之を爲さざることを欲しません。小生は常に貴君を愛し、尊敬し來つたのみならず、貴君が一層着實になり有用になるにつれて——それは幸福な結婚か大概の場合もたらず結果です——益々貴君を愛し、尊敬するであらうからであります。

小生は當地からさう急には歸京しさうもありません。もう二週間位滞在するかと思ひます。二週間といへば、愛するものから離れてゐる人間にとつては長い時日です。二週間が何時終ることやら？ 敬具

ブライトヘルムストン、千七百六十九年九月九日 サム・ジョンソン

ジョンソンの歸京後、われ／＼は屢々會つた。そして私は彼の談話を書き留めて置く習慣を續けてはゐたが、しかしそれは、今から見ればもつと勤勉にやつて置けばよかつたと思ふ程度であつた。當時の私が私の日記にあまり多くの時を割き得なかつたことについては、十分の口實を有してゐた。即ち、コルシカがフランス王權に壓服された以後、パオリ將軍は、最早その勇敢なる國人の首領ではなくなり、辛くも故國から脱出して英國に避難所を求めたのであるが、この人の御世話をするのが、私の義務でもあり喜びでもあつたからである。この時期のジョンソンのくさぐさの談話で、私が書き留めて置いたものを、規則的な排列はあまり顧慮せず此處に述べて見よう。時には別々の日の短い記録が一緒にされることもあり、時にはある一日が重要視されて他と區別されることもあらう。

彼は去つた、自分は、日曜日は堅苦しい嚴格さと陰氣さで遮られねばならぬとは思はぬ、眞面目で單純な行狀で遵られ、ばよいと思ふ、と。

九月十三日、われ／＼は「マイター」で正餐を共にした。私は例の如く空想的な話題をとらへて、野蠻生活の方が幸福であらう、といふ説を主張せんとした。ジョンソン、「君、それは大間違ひだ。野蠻人は文明人以上の肉體的優越をもつてゐない。彼等は一層良い健康をもつてゐない。心勞とか精神的不安とかについて云つても、彼等はそれを超越しては居らず、それに支配されてゐる、——丁度熊のやうに。いや君、そんな逆説を唱へるものではない。そんな話はもうやめたまへ。面白くもないし、勿論有益ぢやない。君と同國のスコットランドの判事のモンボッド卿は、さういふ愚にもつかぬ話を盛んにしてゐる。あの人は容赦したが君は容赦できません。」ボズウエル、「ですが先生、ルツソーもさういふ愚にもつかぬことを語つてゐるぢやありませんか？」ジョンソン、「それはさうさ、しかしルツソーは自分で、愚にもつかぬことを云つてゐることを心得てゐる、そして世間が目を瞪るのを嘲笑してゐるんだ。」ボズウエル、「どうしてさうなんですか？」ジョンソン、「だつて君、あんなにうまく愚にもつかぬことが話せる男は、自分が愚にもつかぬことを云つてゐるのが判つてゐるに相違ないもの。ところがモンボッドに至つては、どうやら——（とクス／＼笑ひ、ハツハツと笑ひながら）——自分が愚にもつかぬことを云つてゐると氣づいてゐないんぢやないかとわしは危ぶむね。」ボズウエル、「では、世間の人の目を瞪

らすために變つた眞似をするのは、いけないことなのでせうか？」デョンスン、「さうだ、そのために虚偽を世間に流布するならば……。いや、どつちにしてもいけないことだね。人間の性質には一般に、他人の目を眩らせようといふ傾向がある。すべて賢い人はそれを矯正せねばならぬ、そして矯正するよ。他人よりすぐれた行ひをして世間の人の目を眩らせようといふのなら、目のくり玉が飛び出すほど眩らせるがよいさ。しかし、馬鹿げたことをして人の目を眩らせるといふことは如何に容易であるか、考へて見たまへ。わしが靴を穿かずに應接間に這入るとすれば、もうそれでいいのだ。君は『スベクテーター』(譯者註、千七百十二年頃アデイス) 及び『ステイルルが執筆した新聞』にある、假髪をかぶらずナイトキャップばかりかぶるといふやうな、ひどく風變りなことをするので、裁判所から精神状態鑑定委員をさし向けられた紳士の話を覚えてゐるだらう。ねえ君、純理から云へば、ナイトキャップが一ばん工合がよいのだ。しかし相對的には、子供たちにおい／＼後を追ひまはされることになつて、便利は帳消しでお釣りがくることになる。」

ロンドンの生活について彼は云つた。「ロンドンの幸福は、その中で暮したことのある者でなければ解らない。わしは敢へて云ふ、今われ／＼が坐つてゐる所を中心にして十哩の圓周内には、英國の残り全部に於けるより一層多くの知識と科學がある、と。」ボズウェル、「たゞ不便なことは、お互ひに大分離れてゐることです。」デョンスン、「左様、しかしそれはロンドンが大きいからだ、そして大きいことが他のすべての便益の原因になつてゐる。」ボズウェル、「私は時々人の住まぬ荒野に引込みたくなることがあります。」デョンスン、「君の生國のスコットランドには荒野が澤

山有るぢやないか。」

私に近々その見込みがあるので結婚生活の仕方について多くの有益な對談を彼から得ようと思つてゐたが、彼はこの話題についてはあまり話さなかつた。スーアド氏は、彼が會つてから云ふのを聞いた。「非常に強固な宗教的信條をもつてゐる婦人とでも結婚するのでなければ、結婚生活は中々幸福に行く場合は少い。」彼は世間一般の意見とは違つて、女が學問があるといふことは、妻としてそれだけ悪いとは云へない、と主張した。それに對して私はアルテミシアス(譯者註、男全まりの女、紀元前二世紀の小アジアの女王)の例を色々思ひ合せて異論をさしはさんだ。

私が、知り合ひの紳士が再婚したのを、先妻を無視するものだと思つて非難すると、彼は云つた、「決してさうでないよ。反對に、もしその男が再婚しなかつたとしたら、先妻が彼に結婚に對する嫌惡を興へたといふ結論になるだらう。それが、再婚したとなれば、先妻は彼を妻帶者と見て、もう一遍さうありたいと欲せしむるほど、幸福にしたのだといふことを示すわけだから、先妻に對して最高の敬意を拂つたことになる。」彼はこの微妙な問題について、さういふ奇警な見方をした。然るに彼は別の場合に於いて、彼がデョンスン夫人に、再婚はしない、といふ約束をもう少しで要求するところであつたが思ひ止まつた、といふことを告白した。私は實際、彼の場合、もしかろいふ要求をしたとすれば不合理だつたらうと思はざるを得なかつた。何となれば、もしデョンスン夫人にして、彼女の若い頃の夫であり子供等の父であつた最初の愛人のことを忘

れたか、或ひは再婚しては済まぬと思はなかつたなら、何故に——その氣さへあるなら——三度目の結婚をするのに差支へがあらうか？ チョンスンは、彼の「デッテイ」を、その死後に於いてさへも飽くまで盲目的に獨占しようとして、彼よりは先口の正直なるパーミンガムの商人の權利を全然無視してしまつたやうに見える。彼女が以前に結婚したことがあるといふことは、時折り彼に幾分の不安を與へたことだらうと思はれる。何故ならば、私は、われ／＼の共通の友人が結婚した時に、彼がから云つたのを覚えてゐるから——「あの男は随分馬鹿なことをした。處女が貰へるのに後家さんを貰つた。」

われ／＼はウィリアムズ夫人の許で一しよにお茶を飲んだ。昨年のこと、私はある朝、チョンスン博士の所でスレール夫人と對面する喜びを得て、種々言葉を交はし、彼女の才智に感服し、又私が彼女に劣らぬチョンスン崇拜家であることを彼女に示す機會を得た。チョンスン博士は私のことを彼女に良く評判してくれたものと見えて、此の晩彼はスレール氏及び彼女からストレッタムに私を招待する大へん鄭重な案内状を渡してくれた。

十月五日、私はこの深切な招待に應じて、ロンドンから六哩の風雅な別荘で、萬端ぬかりない愉快な接待を受けた。チョンスンはすつかり打ちくつろいでみたが、愛情を加味した畏敬を以て仰がれ、主人と主婦は負けず劣らず彼を大事にしてゐるやうだつた。彼がそんなに幸福さうであるのを見て私は嬉しかつた。

彼は機嫌の良い冗談氣分でスコットランドを揶揄する諧謔を連發した。それに應じて私は、固

より國民的偏見の凝り固まりではないが、少しばかり彼と張り合つた。私が、英國の良い園藝家は殆んどすべてスコットランド人だから、園藝家では英國がわれ／＼のお蔭を蒙つてゐる、と云ふとチョンスン曰く、「それは君、わが國より君の國の方が園藝が遙かに必要だからで、その爲に君の國の人間があんなに澤山それを學ぶからだ。君の方では何でもかでも園藝だ。わが國では、ほつて置いて育つものが、スコットランドでは丹念に栽培されなければならないのだ。一寸伺ふがわ、（と椅子のうしろに身を投げかけ、笑ひながら）君の國ではクロイバラを完全に育てることができるかね？」

私か、わがスコットランド人は他家の召使ひに祝儀を與へるといふ、款待の趣旨に背き面倒で見つとも好くない習慣を最初に全廢するといふ名譽をもつたと云ふと、チョンスンは云つた。「君の國は貧乏で、それができないから全廢したんだ。」

スレール夫人はブライアー（譯註、一六六四年—一七三二年、英國の外交家、詩人を兼ねた）の價值について彼と論争した。彼はブライアーを強く攻撃した。曰く、ブライアーは、愛について、それを感じたことの無い者のやうに綴つた、彼の愛の詩は學校で作る詩だ、と。又、『アレクシスは友どちの牧人を避けぬ』やその他の歌を非常に滑稽な口調で吟じたので、われ／＼はみんな何故こんな、荒唐無稽な代物に人々が感服したのかと不思議に思ふやうにされた。スレール夫人は、チョンスンの輕蔑してゐた戀愛小唄を辯護するために、勇敢に論戦これ努めた。しかし到頭彼はから云つて夫人を沈黙せしめた、「奥さん、もうその話は止めになさい。ノンセンスを辯護しようとするれば、どうしたつてノン

センスンになります。」

スレール夫人は次に、軽い陽気な詩に對するギャリツクの才能を褒めた。そして例として『フロリゼルとバーディタ』にある彼の歌を吟じ、次の一行を特別な喜びを以つて感心してゐた。

「われは單純なる者と共に笑み、貧しき者と共に食らはん。」

デヨンスン、「いや、奥さん、それはいかん。デーヴィッド(譯者註、ギャリツクの名)も氣の毒な！ 單純なる者と共に笑む——何といふ馬鹿げたことだ！ それから誰か——さうせずに済むのだつたら——貧しき者と共に食らふことを欲しよう？ いや／＼、われをして賢き者と共に笑み、富める者と共に食らはしめよ。」

私はこの警句をギャリツクに取り次いだところ、作家としての彼の感受性が少なからず苛立たされたのを見て意外であつた。それを宥めようと思つて私は、デヨンスンはわれ／＼の誰をでも容赦しないのだ、と云ひ、友だちをやりこめて笑ふ男を、角(ツノ)の上に一束の乾草を目標に結びつけられてゐる危険な牡牛に譬へた、ホレースの一節を引用した——*Foenum habet in cornu* (彼は角に乾草をもてり)「ギャリツクは激昂して云つた。「さうだ、あの男は一束どころか、納屋一つはいいの乾草をもつてゐる。」

彼はホワイトフィールド(譯者註、カルヴァン派メソヂストの開祖、一七二四—一七七〇年)の辯論の價値をあまり認めようとしなかつた。「彼の人氣は主として、やり方が一風變つてゐるからだ。ナイトキャップを冠つて演壇に立つた

り、樹にのぼつて説教したとしたら、人がぞろ／＼ついて來るに極まつてゐる。」

彼はどういふ風の吹き廻はしか、私が口を極めてその勇敢さを稱揚した、コルシカ人に對して猛烈に悪口を云ひはじめた。彼は云つた。「一體、何んでコルシカ人のことをこんな大仰に騒ぎ立てるのか？ 彼等は二十年の餘もゼノア人と戦つてゐて、未だにその防備のある都市を占領してないぢやないか。二十年もあれば、その城壁を壊してこなく／＼にできるはずぢやないか。城壁をバラ／＼に崩し、石を齒で噛み砕けるはずぢやないか。」砲兵が無い、と云つて議論してもはじまらない。さういふ時の彼には刃向ふ術とては無かつた。

十月十日の晩、私はデヨンスン博士をバオリ將軍に引き合せた。私はかねて、私の崇拜措く能はざるこの兩人物が會見することを望んで止まなかつた。二人は各自、己れの力を知り同時に相手の力を知る、悠揚迫らざる態度で接した。將軍はイタリー語で語り、デヨンスン博士は英語でしゃべつた。そして私が少しばかり通譯することによつて、お互ひに十分理解しあつた。この點で私は、自分を二つの大陸を結ぶ地峽に比した。デヨンスンが近よると將軍は云つた。「先生の御作を拜見し、又ボズウェル君からお噂を伺つて、私は以前から先生を大へん崇拜して居りました。」

將軍は、一つの國語はその國民の特殊な考へ方と風俗に基づいてでき上つてゐるものであること、隨つてそれを知らなければ、その國語を知るわけにいかないといふことを話した。——個々の言葉の直接の意味は解る、しかし、それでは、表現の妙味とか天才の進りとか機智とかいふも

のは一向、ピンと来ない。すべてかういふものは他の觀念への暗示によらねばならぬ。——ジョンスンは云つた。「閣下の國語についてのお話を承つてみると、専門にその方を研究した方のやうで、一國の政治を掌つて居られた方とは思はれません。」將軍は云つた。「Questo è un ironico eran complimento (それは過分なお褒め言葉です。)」ジョンスンは之に對して云つた。「閣下のお話を承らなかつたら私もさう考へるでせう。」將軍は、一般にはびこつてゐる不信心の精神についてどう考へるか、と彼に訊いた。ジョンスン、「この暗い不信心は、世界を通り過ぎる一時的の雲に過ぎないと思ひます。やがて雲は散じて太陽は常の如く赫々と光を放つてせう。」將軍は云つた。「では先生は、彼等が着物でも着換へるやうに信條を取り換へると思はれるのですな。」ジョンスン、「左様、彼等が着物について費す以上の考慮を信條について費さないとすれば、さうならざるを得ません。」將軍は云つた。「當世流行の不信心の中には、勇氣を示さうといふ欲望から發するものが多い。現世の事柄についてそれを示す機會をもたない者共は、死と未來をとりあげてそれを示す對象とするのです。」ジョンスン、「それは愚か千萬な見榮です。恐怖は人間性の強い感情の一つで之を除くことは不可能です。御存知の通り皇帝カロロ五世は、あるスベインの貴族の墓石の上に『此ノ所ニ未ダ曾ツテ恐怖ヲ知ラザリシ人眠ル』とあるのを讀んで、『ではこの男は蠟燭の心を指でつまみ取つたことがないのだな』といふ警句を吐いてゐます。」

ジョンスン博士は私と一しよに家に歸り、夜遅くまでお茶を飲んだ。彼は云つた。「バオリ將

軍は、自分が曾つて會つた人のうちで一ばん高貴な態度をもつてゐる。」彼は軍人が常に一ばんよく馴られてゐるといふ説を否定した。曰く「完全な善い馴といふものは、どれか或る職業に特殊な臭味をもたず、たゞ普遍的な上品な態度を有することだ。然るに軍人に於いては、大概軍人——『サーベルをぶら下げた人』たる烙印が眼につく。」

ジョンスン博士は今夜は、私が議論の種にしようと試みた運命と自由意志といふ困難な問題を討論することを全然回避した。彼は云つた。「君、われ／＼はわれ／＼の意志が自由だといふことを知つてゐる。それだけでいゝさ。」

十月十六日、彼はオールド・ボンド街の私の下宿で、サー・ジョシュア・レノルツ、ギヤリツク氏、ゴールドスミス博士、マーフィ氏、ビツカースタフ氏、トマス・デーヴィス氏と共に正餐を共にする光榮を興へてくれた。ギヤリツク氏は甘へたはしやぎ方で彼の周圍をおやれ廻り、彼の上衣の胸のところを掴み、快活な狡さで彼の顔をふり仰ぎ、彼が健康さうに見えるのを祝した。之に對してこの賢人は首を振り動かしながら、穩やかな満足を以つてそれを見まもつた。來客の一人が定め時刻に來なかつたので、私はかういふ場合普通する通り正餐の給仕を命ずるやう提議し、かう附け加へた。「六人の人間が一人のために待たされるべきではありません。」
「いや、さうでない、」とジョンスンはデリケートな人情味を以つて答へた。「六人が待たされる不快よりも、その一人が、皆が食卓についてしまったことによつて感ずる不快の方が大なる場合には。」ゴールドスミスは退屈な時間をまぎらはすために、自分の服を自慢しながら威張つて歩

き廻つた。どうも彼は眞面目にそれを誇つてゐるらしかつた。彼の心は驚く程さういふ影響を強く感ずるたちであつたから。ギャリックは云つた。「おい／＼、その話はもう止めたまへ。多分君が一ばん悪く——どうだね！」ゴールドスミスは躍氣となつて遮らうとしたが、ギャリックは皮肉に笑ひながらあとを續けた。「いや君は何時だつて紳士らしく見えるだらう、しかし僕は身だしなみが良い悪いを言つてゐるのさ。」「まあ聞きたまへ、」とゴールドスミスは云つた。「洋服屋は僕の赤みがかつた色の上衣を届けて来たときから云つたぞ、**且那**にお願ひが御座います。どなたか**且那**にその服を何處で作つたかと聞く人がありましたら、**ウオーター**路のハローのデヨン・ファイルビイの名をおつしやつて下さいまし。」と。デヨンスン、「それは君、服屋は、さういふ妙な色が大勢の目を惹き、その結果皆が自分のことを訊き、そんな頓狂な色でさへ自分が如何に良い上衣を作ることが出来るだらう、と思つてさうしたまでさ。」

正餐の後、われ／＼の會話は先づボーブのことに向いた。デヨンスンは、ボーブの男の性格は善く描かれてゐるが女の方はそれほどない、と云つた。彼はその力強い朗々たる調子で「衆愚傳」(譯者註、ボーブが自己の敵たる當時の作家等を嘲笑した詩)の數行を誦した。彼がそれを褒めて盛んに談じてゐると、一座の一人はかり口を出した。「それは、そんな詩には立派すぎる。そんな——何についての詩でしたっけ？」デヨンスン(輕蔑するやうな眼で)、「愚物についてさ。あの頃は愚物たることも悪くはなかつたものだ。お前もあの頃生きてゐればよかつたのに！ 今では才人が種切れだから、愚物になつても詰らない。」

十一月十九日(木曜日)の晩を私は彼の家で彼と共に過こした。彼は、私はその一例を示したスコットランド特有の言葉の辭書を完成することを私に勧めた。彼は云つた。「レーは北國の言葉の蒐集を作つた。君の國の言葉を集めれば、言語史に貢獻することにならう。」彼は又、私がしてゐたスコットランドの考古的蒐集を續けるやうに云つた。「大きな本を作りたまへ——二つ折り本を。」ボズウェル、「しかし先生、それが何の役に立つでせうか？」デヨンスン、「何の役にたつか心配したまふな。たゞやりたまへ。」

私は前々日にタイバーンの刑場で幾人かの罪人の處刑を見て来たこと、そして彼等は誰も少しも悪びれた様子が見えなかつたことを話した。デヨンスン、「君、彼等は大概何も物を考へたことが無いんだよ。」ボズウェル、「しかし、死の恐怖は性得のものではありますまいか？」デヨンスン、「それはさうだ、人生の全部はその思ひを拂ひのけることに在る、と云つてよい位だ。」そこで彼は低い、熱心な口調で、自分自身が壊滅する恐ろしい時期についての思索と、その際に、いかに振舞ふべきかについて語つた。彼は云つた。「わしは、一人友だちに傍にゐて貰つたものか、それとも神と自分とだけで事をすました方がよいか、決しかねてゐる。」

他人の不幸に對するわれ／＼の感情の話になつて、デヨンスン曰く、「それはね、その事についてはいろ／＼、やかましく論ぜられてゐるが、誇張が多いね。ほんた、われ／＼には善をなす

やうに促がす感情が或る程度まで有る。しかし、《攝理》は、それ以上はさせるつもりはないのだ。そんなことは何の役にもたゞず、不幸となるだけだらう。」ボズウェル、「しかし、先生、假りにあなたの親友の一人が罪に問はれて捕縛され、絞罪に處せられるかも知れぬとしたらどうです。」
 チョンスン、「わしは彼の保釋を許して貰ふやう、できるだけ盡力する、その他あらゆる援助をする。しかし一旦綺麗さつぱり絞罪にされてしまつたら、わしはくよくよしない。」ボズウェル、「先生はその日食事をなさいますか？」
 チョンスン、「食ふとも。その男も一しよに食つてゐるかの如くに食ふ。パレットイのことを考へて見たまへ、彼は明日死ぬか生きるか、裁かれることになつてゐる。友人等はあらゆる方面から彼のために立つた。が、もし彼が絞罪にされてしまつたら、この人々のうち何人も、その爲にプラム・ブツディングを一と切れでもより少なく食ひはしないだらう。君、さういふ同情的感情が人の心を憂はしむることは極めて輕微だよ。」

私は彼にかういふ話をした——最近フット(譯者註、俳優兼劇作家、一七三〇年—一七七七年)のところまで正餐を共にしたが、彼はトム・デーヴィスから來た手紙を私に示した。その手紙には、自分は「パレットイのこの悲しむべき事件」のために憂慮のあまり睡ることができないでゐるが、あなたも、何か役に立つこととはないか智慧を絞つて見てくれと頼んであり、それと同時に、漬け物屋を營んでゐる商賣熱心の若者を推薦してあつた。その話を聴いて、チョンスン、「それ／＼、それが人間の同情といふものの見本だ。絞罪にされる友人と漬物になる胡瓜。デーヴィスが睡れなかつたのはパレットイのためか漬物屋のためか、われ／＼には解らない。彼自身だつて解らないのだ。それから、彼が

睡れないといふことについてだがね——トム・デーヴィスは、君、大へん豪いんだよ。——トムは舞臺に立つてゐるから、さういふこつは心得たものだよ。わしは舞臺に立つたことがないから、さういふことはできない。」ボズウェル、「先生、私は、多くの人が口に出して云ふほど深くは、他人のために同情を感じないので、自分の心を責める氣になることがよく有ります。」
 チョンスン、「君、彼等の云ふことにこれからは騙されたまふな。さういふ、大へん同情深い方々がなかなか君に深切な行ひをしてくれないことが判るだらう。彼等は同情で義理を濟ますのだ。」

ボズウェル、「フットは大へんユーモアに富んでゐます。」
 チョンスン、「左様。」
 ボズウェル、「彼は性格を表現する珍しい才能をもつてゐます。」
 チョンスン、「あれは才能ぢやない、惡徳だ、他の人はさういふことをするのを慎んでゐるのだ。それは、多くの吝嗇漢から綜合された一人の吝嗇漢といつた風の、一つの種類をなす性格を示す喜劇ではない。個人を示す笑劇に過ぎない。」
 ボズウェル、「あの人は先生の眞似を演じようと思つたことではないでせうか？」
 チョンスン、「こはくつてできないんだ。そんなことをしたら、わしは彼奴の骨をへし折るだらうと承知してゐるからだ。わしは彼奴に、一方の足を切斷するやうな手数は省いてやつたらう、切斷する足一本も残してやらないだらうからな。」
 ボズウェル、「ねえ先生、あの男は不信心者ではありますまいか？」
 チョンスン、「彼奴が不信心者かどうかは知らんね。もし不信心者だとすれば、夫が不信心者だといふ鹽梅式の不信心者だね。といふのは、彼奴はそんな問題は一度も考へたことがないのだ。」
 ボズウェル、「私はかうぢやないかと思ひます——あの男は物を皮相的に考へるので、最

初に心に浮んだ考へに取りつくのだと。」ジョンソン、「そこがやつぱり犬らしいところだよ、手近の一片に食らひつく所がね。君は犬といふものは物を比較する能力をもたぬ、といふことを觀察したことがないかね？ 犬は大きい切れの肉と小さい切れの肉と二つが面前にあると、どつちと見境へをつけずに食つてしまふ。」

翌日、即ち十月二十日、彼は、路上で人を刺し殺した廉で、ロンドンのオールド・ペーリー中央法廷で殺人の審問を受ける、バレットイ氏の人格について証言するやうに求められて、生涯に唯一回のことだつたらうと私は思ふが、證人として法廷に現れた。力強くも「裁きの庭」と呼ばれる、このいかめしい中央法廷に、こんなに綺羅星のやうに天才が竝んだことは無かつた。パーク氏が居り、ギャリツク氏が居り、ポークレア氏が居り、ジョンソン博士が居つた。彼等の有利な証言は、裁判官及び陪審に對して相當重きをなしたことは疑ふべくもない。ジョンソンは、ゆつくり、慎重に明確に証言を行つたが、それは異常に深い印銘を與へた。バレットイ氏が釋放されたことは人のよく知る所である。

われ／＼は彼の家に歸つて(譯者註、十月二十六日「マイ」お茶を飲んだ。ウイリアムズ夫人は盲目ながら十分巧みにお茶をいれた。たゞ茶碗が一ぱいになつたかどうかの確め方が、少々閉口に感ぜられた。何故なら、彼女は指を一定の所まで下げてお茶が觸れるのを待つたことだらうから。デ

ジョンソン博士がこの婦人を夜遅く訪ふお供をする特權——それは「機密に參ずる」とでもいふ感じを與へる——をはじめ許された嬉しさに、私は恰もヘリコン(譯者註、ギリシャの山、アポロの泉であるかのやうに、お茶を一杯又一杯と飲んだ。しかし物珍しさの魅力が消えるにつれて私は段々擇り好みをするやうになつた。それに、私はこの婦人が愚痴つばいたちであることを發見した。

* 後日私は、私に誤解があつたと考ふべき理由をもつた。即ち、彼女と永年親しくし、かういふ事柄をもつと正確に知つてゐさうな婦人からかういふことを聞いた——ウイリアムズ夫人は觸感が非常に鋭敏となつて居り、コップの外側をさはつてどの位一ぱいに近くなつたか判るのであると。

今晚は可成り大きな一座であつた。ジョンソン博士は大へん機嫌がよく、元氣一つばいで、どんな問題が出てても早速一席辯じた。獨學の哲學者ファーガスン氏は、馬無くして動く新發明の機械の話を彼にした。人がその中で坐つてハンドルを廻すとバネ仕掛けで前進するのである。ジョンソンは云つた、「では結局得る所は、その人は自分だけ運ぶか、自分と機械と兩方運ぶか、どつちでも選べるといふだけだね。」ドミニチエツテイ(譯者註、イタ)の話が出ると、ジョンソンは彼の價値を認めようとしなかつた。「この、自慢の方法は何の效能もありはせん。藥物浴は温湯にまさる所は無い。效くのは生ぬるい水分が效くだけさ。」一座の一人が反對の立場を取つて、各種の藥——中には甚だ強い效力を有するものもある——は毛孔を通じて人體に這入りこむ、それ故、温湯中に病氣に有效な物質を混ずれば浴用として卓效を奏し得る、と主張した。それは私にも成程さもあらうと肯かれた。ジョンソンはこれに對しては答へなかつた。しかし、云ひ負かさ

れるのを嫌ひ、飽くまで議論の勝利者たらんと欲して例の最後の手段に訴へた。それはゴールドスミスが、シツパー(譯者註、英國の劇作家、一六七一年—一七五五年)の喜劇中の警句をジョンスンに應用して「ジョンスンは議論のしやうが無い。彼は自分のピストルが不發に終ると、その臺尻をふるつて相手を打ち倒すのだから。」と苦情を云つたところのものである。即ち、ジョンスンはその紳士の方に向き直つて、「では君、ドミニチエツティの所に往つて蒸して貰ふがいよ。だが、忘れずに蒸氣を君の頭にあてて貰ふことだね。何故つて、君の悪いところはそこなんだからな。」これは、哲學者、印刷業者、寄食者、男性、女性の入りまじつた一座から「してやつたり」といふ爆笑を沸かした。どうしてそんな氣紛れな考へが頭に浮んだのか知らぬが、私はかういふ質問をした——「先生、もしあなたが生れたての赤ん坊と一しよに城の中に幽閉されたとしたら、どうなさいますか？」ジョンスン、「それは君、わしはさういふ相客をあまり好まないだらうさ。」ボズウェル、「しかし先生はそれを育てる勞をお執りになりますか？」想像に難くないとほり、彼はこの問題を續けることには氣乗りがしなかつた。が、私が根よく質問をつゞけたのでかう答へた。「それは君、育てるよ。しかし、すべての便宜がなければならぬ。庭が無ければ、屋根の上に假小屋を作つて、赤ん坊をそこに連れて行つて新鮮な空氣を吸はさう。食べ物もやるし、せいぜい洗つてもやらう。それには氣持ちがよいやうに、お湯を用ひ、冷たい水を使つて苦痛を與へるやうなことはしない。」ボズウェル、「しかし、熱くては赤ん坊がだらけはしませんか？」ジョンスン、「馬鹿に熱い湯だと考へてはいけない。わしは赤ん坊を燂ではしないよ。子供を荒つぽく扱ふの

は決して益は無いよ。わしはロンドンから五人の子供をつれて往つて、五人のハイランド(譯者註、スコットランドの山岳地方)の子供を叩きのめさせてお目にかける。君、ロンドンで育つた男でも、田舎で極く荒つぽく育つた男に劣らず、物をかついだり、走つたり、角力をつたりできるよ。」ボズウェル、「食べ物が良いのでロンドンの人間は強くなるのでせうね。」ジョンスン、「さうとも云へまい。強いことでは誰にもひけをとらぬ、あのアイルランド出の轎かきは、馬鈴薯で育つたのだからね。量で質の補ひをするのだ。」ボズウェル、「あなたは私が提供した子に何かお教へになりますか？」ジョンスン、「いや、教へようといふ氣にはなるまいね。」ボズウェル、「その子に教へることに、たのしみをお見出しにならないでせうか？」ジョンスン、「いや、その子に教へることに、たのしみを見出さなければならぬ。」ボズウェル、「あなたは大人に教へることをたのしみなさいますか？」あゝ解りました。先生は、私が子供を教へる時に感ずるだらうと同様なたのしみを、大人を、教へることに見出されるのです。」ジョンスン、「さう——そんな所かも知れぬ。」

穩健なメランヒトン(譯者註、ドイツの宗教改革者、一四九七年—一五六〇年)が「古い宗旨」と呼んだローマ・カトリック教に對して、ジョンスンは、その若干の節々について改善を主張しながらも、一方に於いて敬意を抱いてゐたことは忘れられてはならない。サー・ウィリアム・スコットは、ジョンスンがかう云つたことがあると私に告げた——「新教から舊教に改宗する者は誠實な人間であるかも知れない。彼は何物も棄て去るのではなくて、既に持てるものの上に更に加へるだけだから。然るに舊教が

ら新教に改宗する者は、彼が今猶保持するものと同じ程度に神聖だと考へてゐたものを、そんなに澤山棄てるのだ。さういふ改宗には甚しい「心の分裂」が有るわけで、それは誠實であり永続的であり得ない。」この考への眞實であることは多くの著明な實例の示す所で、讀者も大概思ひ當ることがあるであらう。

私たち二人きりの時、私は死の問題をもち出し、それに對する恐怖は克服できるものであると主張しようとした。私はデーヴィッド・ヒュームが、自分は現在の生存の後に存在しなくなることを考へても、自分が生存しはじめた以前には存在してゐなかつたことと同様、何の不安も感じない、と私に語つたことを彼に話した。デヨンスン、「ほんとにさう考へてゐるのなら、あの男の知覺は變調を呈してゐるのだ、氣が違つてゐるのだ。實はさう考へてゐないのなら、嘘をついてゐるのだ。あの男は、指を蠟燭の火に突つこんでも熱くも何ともないと云ふかも知れん。君はそれを信ずるかい？ 死ぬ際には少くとも、自分が持つてゐるもの全部を棄てなければならぬではないか。」ボズウェル、「フットは、自分は病氣で重態だつた時死ぬのがこはくなかつた、と私に申しました。」デヨンスン、「それはほんとぢやない。フットの胸に、或ひは、ヒュームの胸にピストルをあてて、殺すぞ、と脅して見たまへ。さうすれば判るよ。」ボズウェル、「しかしわれわれは、死の接近に對して覺悟を堅めることができようではありませんか？」此處で私は、彼が當日頃怖れてゐたものを彼の前に持ち出して、悪いことをした、と思ひ當つた。なるほど、彼は超越した氣分にある時は、彼の『人の望みの虚しさ』にある通り、死を、現在の状態から「よ

り幸福なる住ひ」へ「引き退くための蕙みぶかき自然の合圖」と見做したけれども、概して云へば、この恐るべき變化に對する彼の想ひは暗い恐怖に充ちてゐたのである。彼の心はローマの大圓形劇場コロシウムに似てゐた。中央には彼の理性が立つてゐる、それは勇ましい劍士グラディエイターのやうなものだ。ぐるりの檻の中で放たれたら襲ひかゝらうと待ちかまへてゐる、闘技場の野獸にも比すべき、恐怖の念と格闘するのである。一とわたり格闘して彼は野獸をその檻に追ひ返す、しかし殺し果したわけではないので、それ等は尙も彼に挑みかゝるのである。われ／＼は死の接近に對して覺悟を堅めることができはしないか、といふ私の質問に、彼は激して答へた。「いや、そんなことは打つちやつて置くがよい。人間が如何に死ぬかは問題ではない、如何に生きるかが問題なのだ。死ぬといふ行爲は重要ではない。それはほんの瞬間のことだ。」彼は更に、眞劍な面もちでつけ加へた。「人は、それがさうあらねばならぬのを知る、そして服従するのだ。泣きわめいてもどうにもならないのだ。」

私はこの會話をつゞけようとした。彼は大いに怒つて、「もう止めてくれ」と云つた。そして大へん思ひみだれた様子で私を慌てさせるやうな言葉を吐き、我慢ならぬといふ權幕で私に立ち去ることを求めた。そして私が歸らうとすると、嚴しい聲で「明日は會はんぞ」と浴せかけた。

私はおそろしく感亂して家に歸つた。彼の人柄について今まで耳にした苛辣な批評がいろ／＼と私の心にむらがつた。私は、これまで何回となく獅子の頭に首をさしこんだが何事もなく濟んだ男が、到頭首を喰ひ取られて了つた、といふ感じがした。

翌朝、私は書を送つて——私の振舞は悪かつたかも知れない、が、悪意があつてしたわけではない、従つて先生の態度は酷に過ぎると思はざるを得ない——と述べた。それから、今日は會はないといふ約束になつてゐるが、市部に行く途中でお訪ねし、私の時計で五分間だけお邪魔したい、と申し送つた。私はかう述べた。「私の心の中の先生は、昨夜以來雲と嵐につままれてゐます。どうか日の光を拜ませて下さい、そして安心して愉快に私の仕事に就かせて下さい。」彼の書齋に這入つて見ると、幸ひ彼は獨りではなかつた。それだと顔を合せるのにばつがわるいところだつた。客はステイヴンス氏とタイアーズ氏で、二人とも私には初対面であつた。彼は私の手紙を受け取り、自分でも思ひ返して心が釋けた模様で、快よく私を迎へた。そこで案に相違して私も氣が樂になり座談の仲間入りをした。

ジョンソンは或る無暗に澤山書く著述家を貶して云つた。「あの男は匿名で書物を著し、次に別の書物を書いてその中で前の書物を褒めるといふことをよくやつたが、中々ずるいやり方である。」

私は彼に叫びた。「先生、御機嫌が直りましたね。」ジョンソン、「直つたよ。」私は暇を告げようと階段のところまで行つた。彼は私をとめて、にこ／＼しながら云つた、「君、往つてしまへ——内に。」これは奇妙な引きとめやうであるが、私はそれに應じて尙暫く腰を据ゑたのである。この一寸した、思ひがけない喧嘩と和解は——讀者はそれを私があまりに委しく述べたと思は

れるかも知れないが——彼が、時折り機嫌を悪くするといふ難はあるが、心根は常に善良であるといふことを示す證據の一つと見るべきもので、彼の友人等はしよつ中かゝる例に出くわすのである。人の振舞を仔細に微妙に觀察するサー・ジョン・レノルツが、特にかういふことを云つたのを私は思ひ出す——ジョンソンは、一座した誰かに對して粗暴であつた場合には、和解の最初の機會を捉へて、その人のために乾杯するとか、その人に話をし向けるとか、した。しかし相手が、この氣位のある、遠廻しの仲直りの提議を受けつけず不機嫌にしてゐれば、最早意に介せず、自分は當然すべきことはしたので、悪いのは先方だといふ風に考へた。——

十一月十日にスコットランドに出發することになつたので、私はストレッタムの彼の許に、九日にロンドンで會つて戴きたい、それが御都合悪ければそちらにお伺ひませう、といふ手紙を送つた。

九日の遅くまでロンドンに用があつたので、私は十一月十日早朝、彼を訪れた。彼は云つた。「君が結婚されるに際して云つて置くが、人生から、人生が與へ得る以上のものを要求してはいけないよ。君は、度々憂鬱になることがあるだらう、奥さんが十分熱心に君の氣に入るやうにとめない、と思ふことも度々あらう。しかし矢張、大體に於いて自分の結婚は大へん幸福である、と考ふべき理由があるだらうよ。」

彼は深切にもロンドンまで同行してくれ、スコットランドへの旅路に向ふ驛馬車に私が乗り込

むのを見送つてくれた。此所に記録した委細は一部の人々には随分下らなく思へるかも知れないが、大多数の讀者は、それ等が相集つて彼の性格をはつきり浮彫りして見せる、擬ひなき特徴として尊重さるゝことと信ずる。

千七百七十年、年齢六十一歳、——此の年を通じてデヨンスンと私の間の交通は全く途絶えた。それは何れの側が冷淡になつたわけでもなく、たゞ一日延ばしの延滞の結果であつた。それに私はロンドンに住んでゐなかつたから、彼と共に過ごし、その會話を記録する機會をもたなかつた。この空白を補ふため私は、アイルランドのフォークランドの尊レナレナ師マックスウェル博士が深切にも私に提供して下さい、若干の『語録』を讀者に呈しようと思ふ。この人は曾つてテムブルで副説教師たりし人で、長い間デヨンスンと社交上の友人であり、デヨンスンも随分推賞してゐた人物である。

「私がつき合つてゐた間の彼の生活振り一般は、可成り變化の無いものであつた。私は大概十二時頃彼を訪れたが、屢々彼は未だ床の中に居り、或ひはお茶——彼はそれを非常に澤山飲む——を飲みながら辯じたてゐた。彼は大概朝の訪問客の集りをもつた。客は主に文人で、ホークスワス、ゴールドスミス、マーフィ、ラングトン、ステイヴンズ、ボークレア、その他で、時には教養ある婦人等も居た。私は彼を態々訪れた、才智ある上流のフランス婦人があつたのを特に記憶してゐる。彼は、すべての人が之を訪れて相談をもちかける權利を有してゐると思つてゐる、一種の公共的な託宣所と見做されてゐるやうであつた。そしてその人々は十分さうするだけの御利益を得た。彼がどうして文を綴る時を見出すのか、私には合點がいかなかつた。彼は午前中辯じたて、それから料理店に晝食に往き、大概晩くまで居残り、それから誰か友人の家でお茶を飲み、その際大へん長くお神輿を据ゑた、但し夜食をすることは稀であつた。察するに彼は、主に夜間に讀書執筆したのであらう。何故ならば、彼が私と料理店に往くことを斷つたことは殆んど記憶しないし、又、彼は無邪氣な娯樂場と見做してゐたラネラに屢々出かけたからである。

「彼は屢々、自宅から料理店に食事に行く彼を見張つてゐる貧しき人々に、ポケットの銀貨をすつかり與へてしまつた。彼は時刻構はず街を歩いた。そして、悪漢どもは、わしがあまり金を持つてないのを知つてゐるし、あまり持つてゐるさうな風體でもないので、金を奪はれたことは一度も無い、と云つてゐた。

「彼は最も氣さくな話し好きな人であつたが、自分が見世物として招かれるらしい形跡がある

と、いつもその招待を跳ねつけた。

「私が居合せた時、二人のスタッフォードシア州の婦人が、メソヂイスト派に魅力を感じ、その問題について彼に相談に來た。彼は云つた。『やあ、綺麗な馬鹿さんたち！ マクスウェルやわしと一しよに「マイター」で飯を食べよう。そこでその問題を論じよう。』彼女等はその言葉に従つた。食事が済むと彼は一方の婦人を膝の上に抱き上げて小半時も愛撫しつゞけた。

「トウィックナム近傍の田舎の下宿に私を訪れた時、彼は、此處ではどういふ種類の交際があ

るか、と訊ねた。私は、それが主として引退した金持ちの商人から成り立つてゐて、あまり感心しない、と答へた。彼は、さういふ階級の人々をどうもあまり好まない、と云つた。そして曰く、
 《彼等は商賣人の愛想を失くしたのに紳士の行儀は未だ學んでないからだ。》

「デヨンスンは甚だロンドンに愛着してゐた。彼は云つた、人は他の如何なる土地より此所で一ぼん心を充實し得られる、邊鄙な土地では肉體は享樂できるか知らぬが心は飢ゑてしまふ、そして能力は、練習と競争の不足によつて低下しがちである、と。彼は又云つた、ロンドン程よく人の虚榮心や横暴を矯正する所は無い、その譯は、人はそれ自身で善かつたり偉大だつたりするのではなく、自分ほど善くなく偉大でない他の人々に較べてさうなのであるが、首府に於いては人は多くの同等の者と若干の優越する者を見出すにちがひないからである、と。又曰く、ロンドンの人は他の孰れの土地の人よりも輕率な戀愛に陥る危険が少い、その譯は、多種多様な對象が各々自己を主張するうちの、どれを選んでよいか決し兼ねる結果、却つて安全になるのである、と。彼は次に次のやうに語つたことがある——自分は僧職に就くことを承知さへすれば、田舎に於ける、高い地位を興へられかゝつたことが屢々有つたが、首府の高級な社交を棄てるに忍びず、公共生活の愉快な喜びと素晴らしい華やかさに代ふるに、邊鄙な境界の、埋もれた、單調無味な生活を以つてすることは肯じ得なかつた、と。

「彼は云つた、パートンの『憂鬱の解剖』は自分を豫定より二時間も早く起き出さしめた

唯一の書物である、と。

「或る商人の娘のために弔ひの説教を書くことを頼まれたとき、彼は誰でもしさうなことであるが、死んだ本人の性格を問ひ訊した。彼女が目下の者に對し謙遜で親切なのが特色であつた、といふ答に彼は云つた。それは非常に結構な性質である、が、この婦人より目下の者といふのは中々見付けるのが容易であるまい、と。

「或る俳優を評して彼は云つた。その男のセリフは常に何事か起りさうな氣配を示し、何事かを約束するが、演技はそれに伴はない、絶えず新しい期待を抱かせるが、それは結局いつも失望の連続に終る、と。

「自分の云ふところに反對されて激すると、彼は相手をあまりに峻烈に扱ふことがよく有つた。《君、君はこの問題の見極はめがついてないんだ。》とか、《君は無智蒙昧な話し方をする。》とかいふ場合である。私が彼に、或る紳士が、才氣縱横で學問ある人々の集ひの只中で、一と晩中押し黙つてゐたことを話すと彼は云つた、《會話が洪水の様に溢れその男を溺らしてしまつたのだ。》

「彼の人生觀は嚴肅で眞面目なものであつたが、決して氣むつかしく冷嘲的なものではなく、彼の性格の、尙ぶべき感受性を鈍らしたり、優しい情感の影響を忘れしむるやうなことは無かつた。優しい情感の缺乏は才能の缺乏であり、墮落と同様に暗愚の一徴候である、といふのが彼の持論であつた。

「彼は云つた、英國々教會の牧師の説教は一般に平明さが足りない。磨き上げられた辭句や輝やかな文章は一般人の頭の上を飛んで往つてしまひ、その心には感銘を残さない、と。又曰く、沈滞と無氣力に沈淪してゐる一般人の興味を振ひ起すためには、何事かなされる必要が有るかも知れぬ、その意味でメソヂイスト派の新しい様式は大へん望ましい効果を擧げるかも知れぬと思ふ、と。又曰く、心は肉體と同様、變化と新奇を好むものであつて、宗教に於いてさへ新しい外觀と變更を求め、と。又曰く、メソヂイストの教師の若干については兎角の評はあるが、一ヶ月に九百哩を旅し、一週間に十二回の説教をした人(譯者註、開祖チヨシウエスレー)の誠實は疑へない、かくの如き撓まざる勞苦に對しては、單に現世的な報酬が満足を與へ得るものではないからである、と。

「彼は屢々、人生の一般の状態には享樂すべきことよりは忍耐すべきことの方が一層多い、と云ひ、ドライデンの句をよく引用した——

▲奇しき欺瞞よ！ 何人も過ぎし年を再び生きんとは願はず、

しかも人みな、残れる年に樂しみを望むなり▼

彼自身については、自分は生れて以來、天使がさうさせてくれると云つても、二度と繰り返したいと思ふやうな一週間を過ごしたことはなかつた、と云つてゐる。

……

「彼はリットルトン卿(譯者註、一七〇九年)の『對話』を詰らぬ作と考へた。曰く、▲あの人は世間が彼に一生涯告げてゐたことを世間に告げるために机に向つて書物を書いた▼

「或る若い貴族が、昔の英國貴族の勇氣と尙武の精神はどうなつてしまつたのでせう、と云ふと彼は答へた——▲どうなつたかといふのですか、どうなつたか教へてあげませう——それは身代をつくらうといふ氣になつて市部に這入りこんでゐます▼

「偶々會つた或る愚かな退屈な男について彼は云つた、▲あの男はたつた一つの觀念しかもつてゐないらしい、しかもその一つが間違つてゐる▼

「ヂョンスンの加はつてゐる一座から先に歸つた或る紳士について、種々その素性について穿案があつたが何とも見當がつかかねた時、到頭ヂョンスンがかり云ひ出した。▲わしはその人の居ない所で悪口を云ひたくはないが、あの人は代言人だらうと思ふ▼

……

「非常に不幸な結婚生活をした男が、妻君が死ぬと直ぐさま再婚した。ヂョンスン曰く、それは經驗に對する希望の勝利である、と。

「彼は云つた、——事理を解し、教養の有る人は、その妻として適當な伴侶を得なければならぬ。二人の間の會話が、羊肉を煮るか、それとも炙るか、といふやうな問題のみであつては——それすらも恐らくは、どつちにするかといふ論争、であつては悲惨なものである、と。

「彼は屢々次のヴァーヰルのうるはしい句を沈痛な口調で引用した。

「わが生のいと好き日々は、あはれ、逸早く飛びゆき

病ひと、かなしき老いは近づき来る

しかして、勞苦ときびしき死の無情、之を奪ひ去る」(譯者註、六十六行以下)

「彼は、詩人の王と崇めてゐたホーマーについて、ダイオメツドの父が息子をトロイの戦争に送るに際して與へた忠言こそ、異教の作家から引用し得る、たゞ一行にこめられた最も氣高い訓戒であると云つた——

「常に最善の者となり、すべての人にすぐれよ」(譯者註、イリアード第六卷二〇八行、實はダイオメツドにてなくトロイの勇士グラウクスのその父が與へた訓戒)

「ある晩のこと、モンタギュー夫人の家で、最もすぐれた文人等から成りたつ素晴らしい一座が集つた折、彼は自分に示された尊敬と注意に大いに満悦したやうに見えたので、その歸途、私は彼に、今晚の御訪問には非常に御満足ではありませんか、と訊いた。彼は云つた、「いや、大満足といふ程ではないよ。しかし今晚くらゐ氣に喰はぬことの少なかつた晩はあまり無かつたやうだな。」

「彼は云つた、同じくらゐの大きさのどの國に比べても英國の貧民は、より善く給養されて

ゐる。但し小さい州郡や小共和國は問題外である。民衆の大多數が、手のつけられぬ悲惨な状態に喘ぐにまかせてあるやうな國は、必ずや警察も行き届かず、政治も酷いにちがひない。貧民を適當に給養してあるか否かは文明の試験となるものである。尙曰く、教育ある紳士は何處の國でも似たり寄つたりである。下層階級、特に貧民の状態は、國々の差等の眞の標準となるものである。」

「彼は、若しできるなら、立派な果樹園を持つとよい、と私に忠言した。——自分は、乏しい収入で家族を立派に仕上げた牧師を知つてゐるが、その人は家族を主として林檎饅頭で養つた、と語つた。」

「アイルランドの牧師階級の話の序に彼は云つた。スウィフトは偉大な才能の持主で、彼の國に大いに貢獻するところがあつた。パークレーは深遠な學者で、兼ねて精妙な想像力を有してゐた、と。しかしアッシュャーこそ、アイルランド教會の明星と仰がるべき人物である、と彼は云ひ、いづこの教會も之に優るものを誇り示すことはできない——少くとも近代に於ては、と附言した。「私は長年振りでアイルランドに歸る準備をしてゐたので、「マイター」で彼と差向ひで食事をした。私は、多くの愉快な附合ひを得たロンドンを去るのはまことに辛い、と述べた。彼は云つた。「いや、まことにもつとも千萬だ。文學を好む者は誰でもロONDONを去るのが辛いものだ。」

しかし考へて見たまへ、あんたは随分と多くのものを見、多くのことを享樂して來た——あんたは既に最高の装ひをこらした人生を見た、世界はもう他に示すべき新しいものを持たないのだ。長い間公共生活を試み、それを知りつくした人間こそ、そこから隱退すべき資格をいばんよく具へてゐるわけだ。われ／＼は常に未だ試みない境遇にあこがれる、そしてそれが與へ得ないやうな大きな幸福を、得られるものと空想する。いや、知識と善徳はどここの國でも得られるものだ。それにあんたが地方で重きをなせば、あんたが失ふ知的な喜びに對してある程度まで埋め合はせが得られよう。さう云つて、彼は沈痛を極めた口調で次の詩を吟じた。——

《少壯夙に威容の豪華を知りし者、
（知らざるに貶するは無智に過ぎず）

而して華麗のいざなひを眺めたる後、

われはこのはかなき物をいやしむと、斷乎、云ひ得る者、

かゝる者こそ、安んじてわれは生き安んじてわれは死なん（譯者註、ミロワラ（一六六）三年一七〇八年の詩）

かくて彼は慇懃に別れをつげた。そして、私を招いてゐるものが《義務》の觀念であることをよく知つてゐる、と云ひ、《われ／＼はみんなあんたを失つて残念に思ふだらう。Laudu tam-

en.（譯者註、われどわれ誰（八人）と云ふラテン語）】

可許外格規府京東 號六九第規紙賣日

昭和十六年六月二十日印
昭和十六年六月二十八日發行

サミユエル・ジョンソン傳 (上) ***
定價六十錢

岩波文庫
2727-2729

譯者	神吉三郎
發行者	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市牛込區市谷加賀町一丁目 菊地眞次郎

大日本印刷株式會社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九〇〇一八七〇
九〇〇二二九〇〇
振替口座東京二六二四〇番

配給元

東京市神田區
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

(下津製本)

。すまし致替取お。いさ下出申御卒何は品な全完不第丁亂・丁落

讀書子に寄す

——岩波文庫發行に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために異端が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に開き立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す所稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚嚇して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき試みに古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外観を顧みざるも内容に至つては嚴選最良力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫最新刊書

既刊一二三九册(昭和十六年六月)

中村憲吉歌集	齋藤茂吉選	★
斷章上	小牧健夫譯	★
魅せられたる魂(二)	波邊格司譯	★★
政治問答	宮本正清譯	★★
シエイクスピアと	相原信作譯	★
獨逸精神(上)	グンドルフ著	★★★
日本詩史	竹内敏雄譯	★★★
無限抱擁	江村北海著	★★
フィンクの冒険	西澤道寛譯註	★★
アンデルセン童話集(五)	大畑末吉譯	★★
平子本上宮聖德法王帝説	花山信勝校譯	★★
マリヤの讚歌他一篇	家永三郎校譯	★★
	石原謙譯	★★

文庫 目錄

「解説目錄」當分品切乞御説成。
「書目録覽」はあります。

南總里見八犬傳(九)	小池藤五郎校訂	★★★
多情佛心	後編 里見 尊作	★★★
過去と現在(上)	カライル著	★★★
ラサリーリョ・デ・	石田英二譯	★★
トルメスの生涯	會田 由譯	★
三論 玄 義	藤村大助撰	★★
日常生活に於ける精神病	金倉照譯	★★
日常精神病	丸井清泰譯	★★★
標註 一言芳談抄	森下二郎校訂	★
浮雲	二葉亭四迷作	★★★
息子たちと戀人たち(三)	本多顯彰譯	★★
ペンテジレリア	吹田順助譯	★★★
戯れに戀はずまじ	ミユツセ作	★

918
42

言語活動と生活	シャルル・バイイ著 小林英夫譯	★★★
聲曲類纂	藤田徳太郎校訂	★★★
ガリヴァの航海(下)	スウイフト作 野上豊一郎譯	★★
マノリア・マダダレーナ	ヘッペル作 飯常良譯	★
緑のハインリヒ(四)	ケララ作 伊藤武雄譯	★★★
日本渡航記 (フレガート「バルラダ」號より)	ゴンチャロフ著 井上満譯	★★★
アミエルの日記(八)	河野與一譯	★★
葉	隱中 和辻哲郎校訂 古川哲史校訂	★★
二百十日・野分	夏目漱石著	★★★
ハツクルベリイ	マークトウェイン作 中村爲治譯	★★★
フインの冒険(下)	マイエル作 浅井眞男譯	★★
フッテン最後の日々	モーパッサン作 水野亮譯	★
酒樽	他六篇 米川正夫譯	★★★
未成	年下	★★★
ローマ人盛衰原因論	モンテスキュー著 大岩誠譯	★★
竹澤先生と云ふ人	長與善郎作	★★★
千一夜物語(二)	豊島與志雄 佐藤正彰譯	★★
老妻物語上	ベネット作 小山東一譯	★★★
國富論(二)	アダム・スミス著 大内兵衛譯	★★★
ロンバート街	パジヨット著 宇野弘藏譯	★★★
李花集	松田武夫校訂	★★
ペーオウル	厨川文夫譯	★★
ゲエテとの對話	中卷 エツケルマン著 龜尾英四郎譯	★★★
青	春 他二篇 ハルベ作 番匠谷英一譯	★★
魅せられたる魂(三)	ロマンラン作 宮本正清譯	★★★
口ダ	瑞安國世譯	★★
通貨論	福田長三譯	★★★

終

